

阪大 —地域に生き世界に伸びる— NOW



OSAKA UNIVERSITY

2012

2

No.130



トピックス

「新・大阪大学」始動元年 —大阪大学未来戦略機構について—

クローズアップ

大阪大学の国際性の強化を目指して進化する組織

—グローバルコラボレーションセンターの新たな取り組み—

2012 2月号

No. 130

目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
80周年	17
ナウススペシャル	18
キャンパスニュース	20
記念講義報告	30
表彰等	30
人事	34
訃報	36
インフォメーション	38
職員インタビュー	43
海外拠点だより	44
交流協定大学・編集後記	46
クラブ&サークル	47
トピックス	48



漢薬標本類

表紙写真：中尾万三・木村康一博士
蒐集による漢薬標本類

(1920年頃) (薬学研究科所蔵)

「中尾万三博士：生薬材料科学研究の先駆者」

中尾万三博士(1882-1936)は、本草学、自然科学思想や和漢薬の成分研究の先駆者たる薬学者です。日中合意で設立された対華文化事業・上海自然科学研究所の漢薬部長として、中国の漢薬に関する学術研究に貢献し、国内外で若手研究者を指導・育成しました。高弟の同研究所員・木村康一博士(後に大阪大学医学部薬学科(昭和30年7月より薬学部薬学科)教授)と共に蒐集・研究された生薬標本群(約100点)は、東アジアの伝統医薬研究の基盤となる貴重な学術標本(医療文化財)で、中国にも存在しません。また中尾博士は、正倉院御庫薬物や中国古陶磁の科学的研究でも知られています。

(薬学研究科)

表紙デザイン：株式会社ココティエ

「新大阪大学」 始動元年

大阪大学未来戦略機構について

年頭挨拶でお伝えしましたとおり、総長のリーダーシップのもと、部局横断的な教育・研究を推進するために、新たに「大阪大学未来戦略機構」が発足しました。これまで専門領域の教育・研究は各部局で行われてきましたが、現代社会には解決すべき幾多の課題が立ちはだかり、専門領域を越えた新たな取り組みが求められています。そのため、未来戦略機構では総長を機構長として、中長期的視野に立ち大学全体を俯瞰しつつ、部局横断的に教育・研究を推進します。

未来戦略機構の運営にあたっては、機構長を補佐するために総長が指名する副学長が副機構長をつとめ、機構の中に設けるいくつかの教育研究推進部門の部門長と全副学長からなる機構会議で、運営、人事、予算等に関して迅速な意志決定を行います。各部門や機構の総務、人事、広報、会計、教務などの事務を効率的に遂行するために、未来戦略機構事務局を設け事務担当理事が統括します。

未来戦略機構には、昨年文部科学省に「博士課程教育リーディングプログラム」として本学から採択された「超域イノベーション博士課程プログラム」と「生体統御ネットワーク医学教育プログラム」の2つの部門を設けました。「博士課程教育リーディングプログラム」は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、専門分野の枠を超えて最高学府に相応しい大学院の形成を推進する事業です。大阪大学のリーディングプログラムは、深い専門性の追究により物事の本質を見極める方法論を修得するとともに、一芸で極めた技を百芸に適用できるような汎用的能力を身につけて、グローバル社会で活躍する人材を送りだすことを目指しています。プログラムに参加する大学院生は各研究科における大学院科目に加えて、未来戦略機構が提供するリーディングプログラム科目を履修します。

大阪大学未来戦略機構の設置



未来戦略機構には、今後、人文社会系、理工系、生命科学系、医歯薬系、あるいは科学技術政策、生命倫理や国際問題など、大阪大学が分野横断的に進めるべきチャレンジングな教育研究推進部門が加わることになるでしょう。現在の部局における専門分野の教育・研究を大阪大学の縦系に例えると、新たに設置する未来戦略機構における分野融合的な取り組みは各部局にまたがった大阪大学の横系と見なすことができます。大阪大学の全構成員が現在の活動を1ランク向上させ、この縦系と横系をしっかりと織りなすことができれば、大阪大学が世界トップクラスの大学として輝き続ける基盤となることでしょう。

大阪大学の国際性の強化を目指 ーグローバルコラボレーションセンターの新たな

はじめに

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下、GLOCOL）は、大阪大学と大阪外国語大学の統合を契機に、その教育研究資源を有効に活用して大阪大学の国際性の発展に寄与するため、平成19年4月に設立された。設立5年目を迎えたGLOCOLは、3代目のセンター長である大橋一友・医学系研究科教授を迎え、より一層の進化を遂げようとしている。GLOCOLの設立の経緯などの詳細については、平成20年8月号の阪大NOW クローズアップ「真の国際性を備えた人材の養成を目指して」に譲るとして、ここではおもに、その後の発展と今後の展望を中心に書きたい。前半では、GLOCOL全体の発展について、後半では、平成22年度に設置された海外体験型教育企画オフィス（FIELD0）の活動を中心に記述する。

I GLOCOLの発展

①連携に基づいた教育プログラム

GLOCOLは、教員数20人に満たない小さなセンターである。ただし、大阪大学のほとんど全ての研究科から兼任教員になっていただいている先生方がおり、この兼任の先生方とその他GLOCOLの活動に関心をお持ちの先生方を核として、積極的なコラボレーションが行われてきた。

その結果、大学院高度副プログラムは、設立の早い段階で企画され実施に移された3つのプログラムに加え、さらに4

つのプログラムが試行、実施され、現在では、7つのプログラムが提供されている。学内の多くの部局と連携しつつ、多様な教育プログラムを提供してきたことがGLOCOLのこれまでの発展の特徴の一つであると言えるであろう。

また、平成23年度には、GLOCOL科目の設置が認められ、GLOCOLの専任教員が中心となって約40科目を提供している。これらの科目の多くは高度教養プログラム「知のジムナステックス」に登録され、高度副プログラムとは別に全学の学生に提供されている。



GLOCOLが提供する高度副プログラム

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/education/minorprogram.html>

して進化する組織

取り組みー

②グローバルな課題に取り組む GLOCOL 共同研究

GLOCOL は、教育を行う前提として研究の役割を重視している。平成 22 年からは、GLOCOL が組織的に行う従来の研究活動を見直し、教育におけるよりもさらに一層、兼任教員の役割を重視した GLOCOL 共同研究をスタートした。GLOCOL 共同研究は、GLOCOL の専任教員と兼任教員が共同して国際的な課題に関する研究テーマを設定し、研究のシーズを探すもので、共同研究の期間内にこれをより大きな研究プロジェクトに進展させる努力をすることと、研究成果について成果発表会で公表することが義務付けられている。実際にこれらの共同研究を母体として、外部資金による大型研究プロジェクトへの申請が行われ続けており、後述する SATREPS の場合のように、その活動の成果として実際に幾つかのプロジェクトが採択されるに至っている。

II 海外体験型教育企画オフィス (FIELD0)

GLOCOL の発展の中で、最も特筆すべきなのは GLOCOL 内に設置された海外体験型教育企画オフィス (FIELD0) であろう。FIELD0 は、海外での実地体験型学習と実践をサポートすることを目的として、平成 22 年 8 月 1 日付けで設置された。FIELD0 の役割は、大阪大学全学の大学院生を対象とした海外フィールドスタディや海外インターンシップなどを、学内の様々な部局と協力しつつ企画し、地球規模の諸課題に主体的に取り組むことのできる人材の育成をより一層推進することである。



Fieldwork, Internship and
Experiential Learning Design Office
GLOCOL, Osaka University



大阪大学豊中キャンパス
大学教育実践センター教育研究棟 13 階

実施中の GLOCOL 共同研究のリスト

- ・ ソーシャル・キャピタル、防災・災害復興、非営利セクター研究 (学内連携) 研究代表者: 山内直人 国際公共政策研究科教授 (2011 ~ 2012 年度)
- ・ 健康の社会決定要因に関する日英比較研究 (国内連携) 研究代表者: 本庄かおり GLOCOL 特任准教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ 先住民・エスニックマイノリティのディアスポラとグローバリゼーション (学内連携) 研究代表者: 池田光穂 CSCD 教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ 日中を巡る国際関係の社会的基盤: 大阪大学における日中研究・教育プラットフォーム構築を目指して (学内連携) 竹内俊隆 国際公共政策研究科教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ 超領域アプローチによる東アジアの高齢者ケアシステムの構築 (学内連携) 牧本清子 医学系研究科教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ 理工系学生における異文化間コンピテンシー向上のための教育に関する実証的研究 (学内連携) 池道彦 工学研究科教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ アジア諸国における留学動向についての研究 (学内連携) 西村謙一 国際教育交流センター准教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ 環境インフラストラクチャー: アジアとヨーロッパにおけるサステナビリティのための技術 = 社会システムの民族誌 (国際連携) 森田敦郎 人間科学研究科准教授 (2010 ~ 2011 年度)
- ・ アジア諸国との連携によるバイオマス利用電力自給技術に関するプログラムデザイン方法の開発 (国際連携) 三宅淳 工学研究科教授 (2010 ~ 2011 年度)

① GLOCOL 海外フィールドスタディ

GLOCOL におけるフィールドスタディへの取り組みは、FIELDO の設立以前に薬学研究科と共同で行われてきた組織的な大学院教育改革推進プログラム「健康環境リスクマネジメント専門家育成（平成 21～23 年度）」における海外研修に始まる。このプログラムにおいて GLOCOL は、大学院教育の国際化に関する部分を担当した。このプログラムの中で培った経験とネットワークは、既述の大学院高度副プログラム「グローバル健康環境」の構築にも生かされている。

このプログラムの海外研修は、GLOCOL フィールドワークのプロトタイプとなる要素を多く備えていたが、最も重要な点は、それが当初から複数の分野の学生の参加を前提としており、実際に薬学研究科以外の研究科に所属する学生が多く参加したことである。複数の異なる専門性を持つ学生が、特定地域でチームを作って協働しながら調査を行うスタイルは、FIELDO 設置以降に企画され実施された GLOCOL 海外フィールドスタディに継承されている。

GLOCOL 海外フィールドスタディは 2 単位の科目（通年）として提供されているが、その科目内のフィールドスタディ・プログラムに参加する学生は、全員「フィールドワークの実践と倫理」「海外リスク管理」が必修となっている。



GLOCOL 海外フィールドスタディの様子（パラオ）

平成 23 年度までに GLOCOL が主体となって実施された海外フィールドスタディ

- ・「平成 22 年度大学院 GP 健康環境リスクマネジメント専門家育成海外研修プログラム」（中国、ベトナム、タイ、計 16 名）
- ・「グローバル化が進むパラオにおける生活習慣の変容—多角的視点からみた健康問題の現状と将来展望—」（パラオ、4 名）※試行プログラム
- ・「国連機関訪問・聞き取り調査」（アメリカ、4 名）※試行プログラム
- ・「近代化による北タイ少数民族の伝統的生活の変容」（タイ、4 名）※試行プログラム
- ・「グローバル化時代の生活習慣の変化と健康問題」（パラオⅠ、5 名）
- ・「援助案件形成：気候変動に伴う農地・集落への影響」（パラオⅡ、6 名）
- ・「近代化による北タイ少数民族の伝統的生活の変容」（タイ、5 名）
- ・「自然災害がもたらす影響と開発問題」（フィリピン、5 名）
- ・「ショートステイ・ショートビジット 『生物資源と環境』」（タイ、ベトナム、7 名）
- ・「ショートステイ・ショートビジット 『食と健康環境』」（ベトナム、タイ、6 名）
※大阪府立大学と共同実施のため、大阪府立大学の学生 1 名を含む。
- ・「ショートビジット 『グローニンゲン大学』」（オランダ、15 名）
- ・「ショートビジット 『天津・南開大学』」（中国、5 名）



GLOCOL 海外フィールドスタディの様子（タイ）

GLOCOL 海外フィールドスタディの成果
(http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/fieldo/fieldstudy_hokoku110427.html)

② GLOCOL 海外インターンシップ

海外フィールドスタディが、科目として設定され、プログラムの内容も、かなりの部分を教員が企画しているのに対して、海外インターンシップは、科目「海外インターンシップⅠ・Ⅱ」の履修を前提としているものの、基本的に学生自身がインターンシップ先と連絡を取り、申請を行い、3 カ月から 1 年間のインターンシップを一人で行うものである。助成と教員の手厚いサポートがあるが、基本的に学生の主体性や積極性が問われる形の企画となっている。

海外インターンシップに関連して、国際機関や NGO などとの MOU が締結されつつあり、今後、学生のインターンシップ

先の候補が拡大することが期待される。

海外インターンシップ平成 23 年度実績

- ・ Lokiniti（インド、国際公共政策研究科）
 - ・ JICA ホンジュラス事務所（ホンジュラス、工学研究科）
 - ・ チェンマイ大学日本研究センター（タイ、人間科学研究科）
 - ・ 国連広報局（アメリカ、国際公共政策研究科）
 - ・ 国連 PKO 局（アメリカ、国際公共政策研究科）
 - ・ UNICEF ケニア事務所（ケニア、国際公共政策研究科）
 - ・ OECD（フランス、経済学研究科）
 - ・ OECD（フランス、国際公共政策研究科）
- ※カッコ内は行き先国名と学生の所属

③ STUDIO/GLOCOL アソシエイツ

FIELDO には、教育プログラムのほかに、海外体験型教育に関する学生の主体的な学習を支援するための施設と組織が存在する。

まず、FIELDO に併設されている学生用自主学习スペース STUDIO である。STUDIO では、海外インターンシップ、海外フィールドスタディに関する図書閲覧、インターネットでの情報検索、プログラム経験者、教職員による相談、プログラムの自主的企画立案のための情報収集、事前事後学習、グループ学習などが可能となっている。

また、FIELDO には、海外体験型教育に関心をもつ大学院生を対象に、FIELDO アソシエイツ制度を設けている。この制度では、アソシエイツの知識と経験にもとづいて学部生、大学院生のインターンシップ、フィールドスタディをサポートするとともに、アソシエイツ自身が FIELDO での実務経験を通して海外での実践的活動や国際的な研究活動を行う資質を涵養することを目的としている。

Ⅲ 今後の展望

平成 22 年の FIELDO 設置と、今年度からの本格運用の開始は、設立 5 年目を迎えた GLOCOL にとって大きな節目となった。GLOCOL の進化と発展は、今後も継続していく見込みである。

まず、研究の面で特筆すべきは、地球規模課題対応国際科学技術協力 (SATREPS) に採択されたことである。GLOCOL にとっては、前センター長の栗本英世・人間科学研究科教授が代表を務める科研基盤研究 (A)「フード・セキュリティの人類学的研究 (平成 22～25 年)」に続く、二つ目の大型研究事業である。本事業のテーマは、「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発 (ベトナム)」であり、山本容正・GLOCOL 招へい教授を代表者とし、GLOCOL、薬学研究科、大阪府立公衆衛生研究所などの参加を得て、ベトナムと日本において、研究だけでなく教育と実践に関する活動も行う。

次に、教育面でも平成 24 年度以降、大きな変化が見込まれる。GLOCOL では、平成 23 年度から新しく始まった JASSO の留学生交流支援制度 (ショートステイ、ショートビジット) に応募し、SS&SV プログラムに 2 件と SV プログラムに 1 件が採択された。平成 24 年度についてもすでに 8 件を申請しているが、今後はこのような制度の性格に合わせ、海外フィールドスタディにも短期ながら大学間の交流 (留学) の要素を入れる必要性も考えられる。このような背景と、各研究科や専攻のニーズを踏まえたプログラムを構築するため、従来の GLOCOL フィールドスタディよりは、対象となる専門を絞った GLOCOL フィールドスタディ S (1 単位) を平成 24 年度から科目として提供する見込みである。

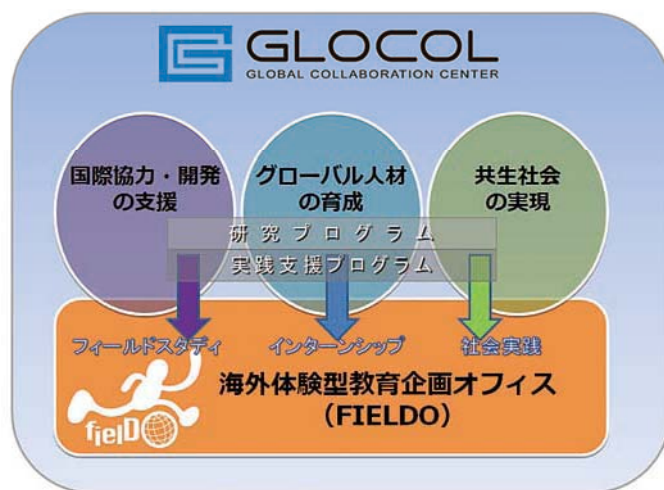
そして、もう一つ重要な変化に、GLOCOL のミッションの一つに「グローバル人材」の育成という要素が加わりつつあることがある。文科省が、この概念に関する取り組みを非常に



FIELDO 内に置かれた海外体験型学習に関する学生の自主学习スペース STUDIO において活動する FIELDO アソシエイツ

重視していることは、すでに広く知られているところである。GLOCOL は、国際教育交流センターと連携して、平成 24 年度から立ちあがる全学教育推進機構の海外教育部門を担当し、海外インターンシップなどを柱として、グローバル人材の育成を進めていく見込みである。

海外フィールドスタディや海外インターンシップの企画と、これをサポートする体制は、これも新たに立ち上がるリーディング大学院オールラウンド型「超域イノベーション博士課程プログラム」でも、「超域イノベーション海外実習」や「超域イノベーションインターンシップ」として生かされることになるだろう。平成 22 年度から始まったばかりの海外体験型教育の取り組みは、早くも大きく飛躍を遂げようとしていると言える。



GLOCOL の主要事業

役員室だより

2012. 2 Vol.46

大学の動き

平成24年度概算要求事項に係る予定額の伝達について

平成24年度概算要求事項については、昨年の7月6日「大学改革促進係数」(23年度▲1.6%)については、日に文部科学省に提出し、文部科学省から財務省への附属病院運営費交付金を要求しないことにより、▲概算要求の結果、12月下旬に予定額の伝達がありました。1.3%となっています。

平成24年度概算要求事項予定額伝達内訳

区 分	事 項 名	備 考
【学部・大学院組織等整備】		
経済学研究科	博士前期課程専攻の改組(3専攻を2専攻へ、入学定員の増減なし)	
歯学研究科	博士課程専攻の改組(2専攻を1専攻へ、入学定員の増減なし)	
薬学研究科	博士後期課程及び博士課程(4年制)の設置(博士後期20名増、博士(4年制)10名増)	旧課程△32名減
薬学研究科	博士前期課程入学定員の増(15名増)	
言語文化研究科	博士前期・後期課程専攻の改組(2専攻を3専攻へ、入学定員の増減なし)	
連合小児発達学研究科	博士後期課程入学定員の増(5名増)	3大学連合から5大学連合へ

【特別経費】(事項名称における太斜字は継続分を示す。)		
○プロジェクト分		
①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
グローバルコラボレーションセンター	国際協力・共生社会のための実践的教育改革事業—グローバルコラボレーションセンター—(9-6)	
サイバーメディアセンター	大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業(3-3)	
基礎工学研究科	量子機能融合による未来型材料創出事業—スピントロニクス、オプトロニクス、モレトロニクス、ケントロニクスの融合による未来型機能材料創出事業—(4-3)	
歯学研究科・歯学部附属病院	「口の難病」から挑むライフ・イノベーション(6-2)	
環境イノベーションデザインセンター	想創技術社会実現のための「環境イノベーションデザイン」教育研究拠点形成事業(4-1)	新規
生命機能研究科	生命動態イメージングによる最先端生命科学の推進—生命をシステム科学する—(5-1)	新規
②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
コミュニケーションデザインセンター	コミュニケーションデザイン教育事業の推進—コミュニケーションデザイン・センター—(11-8)	
学際融合教育研究センター	学際融合教育事業の推進—学際融合教育研究センターの構築—(4-3)	
ナノサイエンスデザイン教育研究センター	ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進—多重ネットワーク型産学・国際連携人材育成—(3-3)	
医学部附属病院	医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラムの開発—医療安全学の構築と人材育成—(4-3)	一般経費へ組替
知的財産センター	総合的知的財産教育事業の推進—知財センター(IPrism)の設置—(6-3)	
薬学研究科	先導的薬剤師養成に向けた実践的アドバンスト教育プログラムの共同開発(6-3)	
情報科学研究科金融・保険教育研究センター	ソフトウェアイノベーション先導のための研究教育プログラムの開発(4-2)	
③大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
科学教育機器リノベーションセンター	革新的研究教育基盤機器開発整備事業(5-5)	
産業科学研究研究所	附属研究所間アライアンスによるナノとマクロをつなぐ物質・デバイス・システム創製戦略プロジェクト(6-3)	
接合科学研究研究所	特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト(6-3)	
蛋白質研究所	生命分子素子から生命システムの全体像を解き明かす多次元国際研究(6-3)	
レーザーエネルギー学研究センター	レーザー相対論核科学の開拓(6-3)	
核物理研究センター	サブアトム科学推進事業(4-3)	
超高圧電子顕微鏡センター	超高圧電子顕微鏡連携ステーション(第Ⅰ期)(6-3)	
医学系研究科(保健学専攻)・社会経済研究所・薬学研究科・人間科学研究科・歯学研究科・基礎工学研究科	高齢双生児レジストリーに基づく双生児研究基盤の構築—心豊かで健やかな超長寿社会を目指して—(4-2)	
④産学連携機能の充実		
臨床医工学融合研究教育センター	医・工・情報連携によるハイブリッド医工学産学連携拠点整備事業—医工情報連携センター構築にむけて—(4-2)	
設備サポートセンター整備経費		
科学教育機器リノベーションセンター	設備サポートセンター整備経費(3-2)	

○全国共同利用・共同実施分		
産業科学研究所	物質・デバイス領域共同研究拠点によるネットワーク型共同研究事業 (6-3)	
社会経済研究所	行動経済学公募共同研究プロジェクト (6-3)	
微生物病研究所	微生物病共同研究拠点事業 (6-3)	
接合科学研究所	接合科学共同利用・共同研究拠点事業 (6-3)	
蛋白質研究所	蛋白質研究共同利用・共同研究拠点事業 (6-3)	
核物理研究センター	サブアトム科学共同研究拠点事業 (6-3)	
レーザーエネルギー学研究センター	超高強度レーザーが拓く高エネルギー密度科学の戦略的研究拠点事業 (6-3)	
○教育関係共同実施分		
日本語日本文化教育センター	日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業 (5-2)	新規
○基盤的設備等整備		
医学部附属病院	手術用水処理装置	新規
歯学部附属病院	オーラルヘルスユニット (38台)	新規
【病院特別医療機械設備 (長期借入金対象)】		
医学部附属病院	磁気共鳴断層撮影装置	
医学部附属病院	脳神経外科顕微鏡手術システム	

平成24年度予算案における国立大学法人等整備の実施予定事業

■継続事業 (2件)

- (豊中) 学生交流棟施設整備事業 (PFI 事業 13-8)
- (吹田) 研究棟改修 (工学部) 施設整備等事業
(PFI 事業 13-7)

■新規事業 (4件)

- (吹田) 総合研究棟 (工学系)
- (医病) ライフライン再生 (自動制御設備等改修)
- (吹田) 生命動態システム科学研究拠点施設
- (豊中) 文理融合型総合研究拠点施設

大阪大学Webホスティングサービスの開始について

情報基盤本部では、大学運営の効率化及び情報基盤整備に係る全学的な維持管理経費の削減を行うため、各部署等において独自に運用している Web サーバ、メールサーバについて、大学が構築した共通プラットフォームを利用するキャンパスクラウドの検討を行い、先にサービスを開始した「大阪大学キャンパスメールサービス」に続き、この度、あらたに「大阪大学 Web ホスティングサービス」を開始しました。

本サービスは、全学的な業務やプロジェクトに利用しているシステムをキャンパスクラウドの仮想サーバ上でサービスするもので、基礎データシステム、健康診断問診システムなどの導入を予定しています。

なお、情報基盤本部としては、平成 24 年度中に 10 システム程度の導入を目指していますので、導入希望のシステムがありましたら、利用申請・ご相談下さい。

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、12 月及び 1 月の役員会で次の事項が承認されました。

- 大学教育実践センターの廃止 (平成 24 年 3 月 31 日)
- 全学教育推進機構の設置 (平成 24 年 4 月 1 日)
- 蛋白質研究所附属プロテオミクス総合研究センターの改組及び時限の廃止 (平成 24 年 4 月 1 日)
・名称を「蛋白質研究所附属蛋白質解析先端研究センター」に変更

教育・情報室

平成24年度大学教育改革の支援の充実関連予算

去る12月24日に平成24年度政府予算案が閣議決定されました。国公立大学を通じた大学教育改革の支援の充実関連予算は、以下のとおりです。

【主なプログラムの予定額】

・博士課程教育リーディングプログラム	(116億円)
・卓越した大学院拠点形成支援補助金【新規】	(80億円)
・グローバルCOEプログラム	(131億円)
・情報技術人材育成のための実践教育ネットワーク形成事業【新規】	(6億円)
・大学間連携共同教育推進事業【新規】	(30億円)
・産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【新規】	(23億円)
・口蹄疫等家畜伝染病に対応した獣医師育成環境整備事業	(0.3億円)
・大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業【新規】	(10億円)
・グローバル人材育成推進事業【新規】	(50億円)
・大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業	(26億円)
・大学の世界展開力強化事業	(27億円)
・がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン【新規】	(21億円)
・基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成【新規】	(4億円)
・大学病院における医師等の勤務環境改善のための人員の雇用	(21億円)
・医学部・大学病院の教育研究活性化及び地域・へき地医療支援人材の確保【新規】	(9億円)

高度教養プログラムについて

「高度教養プログラム：知のジムナスティックス」は、本学の学部高年次、及び大学院生が選択して履修することができるプログラムで、「一定の専門知識を身につけ、(職業人あるいは研究者として)社会にまもなく出て行く学生に対して、専門教育以外に必要とされる知識や能力を与える教育」として平成23年度から開始しました。

高度教養プログラムの科目は、知識習得を中心としたものと多様なスキルの習得を含むものがあり、総合大学である大阪大学全学の多様な科目から、平成24年度は大学院生のために219科目(平成23年度177科目)、大学院生および学部高年次のために54科目(平成23年度35科目)が提供される予

定です。それぞれの科目には、その特色や狙いに応じて、次の4種類のキーワードが付してあります。

- 「世界を舞台に活動する」
- 「異分野の融合を社会に演出する」
- 「成熟した市民社会を創る」
- 「タフな知性で社会を輝かせる」

これらのキーワードを参考に、学生が一人ひとりの希望や計画にしたがって自由に科目を選択し、独自のプログラムを設計することになっています。修得した単位が修了要件あるいは卒業要件の単位に含まれるかどうかは、学生が所属する研究科・学部の規程に従います。

平成24年度提供の「大学院高度副プログラム」「科目等履修生高度プログラム」および「副専攻プログラム」について

学際的な大学院教育プログラムとしての「大学院高度副プログラム」と「科目等履修生高度プログラム」および「副専攻プログラム」は、本学の教育の大きな特色となっています。

本年度は大学院高度副プログラム35件を実施していますが、平成24年度は42件に拡大し、科目等履修

生高度プログラムは本年度に引き続き7件実施します。

また、より広く深い専門的な素養を培うための「副専攻プログラム」を本年度は3件実施していますが、平成24年度は新規に1件のプログラムを開設し、4件の副専攻プログラムを実施します。次頁の一覧表をご参照ください。

平成24年度 大学院等高度副プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案（幹事）部局	連携部局	修了要件 単位数	履修 対象者	備考
1	継続	アート・メディオロジー入門講座—理論と実践	文学研究科	CSCD	8単位以上	M(Dも可)	
2	継続	イノベーションリーダー人材育成基礎プログラム	経済学研究科	医学系、工学	10単位以上	M・D	
3	継続	健康医療問題解決能力の涵養（旧：医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養）	医学系研究科（医科学専攻）	—	8単位以上	M・D	プログラム 名称変更
4	継続	高度がん医療人材育成プログラム	医学系研究科（保健学専攻）	薬学、核物、CSCD	8単位以上	M・D	
5	継続	まちづくりデザイン学	工学研究科	CSCD	8単位以上	M	
6	継続	高度溶接技術者プログラム	工学研究科	接合研	10単位以上	M・D	
7	継続	学際光科学	工学研究科	理学、基礎工	8単位以上	M・D	
8	継続	キャリアデザイン～高度な学びを活かすキャリアパスをデザインする～	工学研究科	基礎工	8単位以上	M・D	
9	継続	国際標準化	工学研究科	国際公共	8単位以上	M・D	
10	継続	量子エンジニアリングデザイン研究特別プログラム	工学研究科	理学、基礎工、情報、 産研、科学教育	8単位以上	M・D	
11	継続	認知脳システム学	基礎工学研究科	人間、医学系、工学	10単位以上	M・D	
12	継続	言語情報処理の手法と展開	言語文化研究科	—	8単位以上	M・D	
13	継続	グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科	—	8単位以上	M・D	
14	継続	IT Spiral	情報科学研究科	—	14単位以上	M1	
15	継続	高度情報ネットワーク実践スペシャリスト	情報科学研究科	—	8単位以上	M	
16	継続	感染症学免疫学融合プログラム	微生物病研究所	医学系、免疫学	10単位以上	D	
17	継続	インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流センター (H22年度実施分: 留学生センター)	言文	8単位以上	M・D	
18	継続	臨床医工学・情報学融合領域 の人材育成教育プログラム: 専門科	臨床医工学融合 研究教育センター	医学系、歯学、 薬学、工学、 基礎工、情報、 実践、CSCD	9単位以上	M・D	
19	継続	臨床医工学・情報学融合領域 の人材育成教育プログラム: 高度職業人育成科	臨床医工学融合 研究教育センター	経済、医学系、 薬学、CSCD	10単位以上 11単位以上 11単位以上	M・D	
20	継続	コミュニケーションデザイン	コミュニケーション デザイン・センター	文学、GLOCOL	8単位以上	B5、6・ M・D	
21	継続	金融・保険	金融・保険教育 研究センター	経済、理学、 基礎工、情報	8科目以上	M・D	
22	継続	グローバル共生	グローバルコラボ レーションセンター	人間、法学、言文、 国際公共、CSCD	8単位以上	B5、6・ M・D	
23	継続	人間の安全保障と開発	グローバルコラボ レーションセンター	人間、経済、医学系、薬学、 工学、国際公共、実践、CSCD	8単位以上	B5、6・ M・D	
24	継続	司法通訳翻訳	グローバルコラボ レーションセンター	人間、法学、 言文、国際公共	10単位以上	B5、6・ M・D	
25	継続	現代中国研究	グローバルコラボ レーションセンター	文学、人間、法学、経 済、言文、国際公共	8単位以上	M・D	
26	継続	国連政策エキスパートの養成	グローバルコラボ レーションセンター	人間、医学系、薬学、 国際公共、CSCD	8単位以上	M・D	
27	継続	グローバル健康環境	グローバルコラボ レーションセンター	人間、医学系、薬学、 工学、国際公共	8単位以上	B5、6・ M・D	
28	継続	医療通訳	グローバルコラボ レーションセンター	人間、医学系、薬 学、言文、CSCD	8単位以上	M・D	
29	継続	環境イノベーションデザイン学 (旧：サステイナビリティ学)	環境イノベーション デザインセンター	人間、経済、医学系、工 学、基礎工、国際公共、CSCD	8単位以上	M・D	プログラム 名称変更
30	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究 訓練プログラム（博士前期課程高度学際教育）	ナノサイエンス デザイン教育研究 センター	理学、医学系、薬学、工学、基 礎工、生命、産研、接合研、超 高压、極限、太陽、レーザー研	9単位以上	M	
31	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究 訓練プログラム（博士後期課程社会人特別選抜）	ナノサイエンス デザイン教育研究 センター	理学、医学系、薬学、工学、基 礎工、生命、産研、接合研、超 高压、極限、太陽、レーザー研	10単位以上	D	
32	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究 訓練プログラム (博士後期課程教育研究訓練プログラム)	ナノサイエンス デザイン教育研究 センター	理学、医学系、薬学、工学、基 礎工、生命、産研、接合研、超 高压、極限、太陽、レーザー研	8単位以上	D	
33	継続	知的財産法を修得した人材育成	知的財産センター	法学研究科	10単位以上	M・D	
34	新設	グローバル化とコンフリクト—人間科学的アプローチ	人間科学研究科	文学、国際公共、 CSCD、GLOCOL	8単位以上	M	
35	新設	持続可能な日本の進路を考える—成熟期を経た省資源・ 少子高齢化の日本の安心安全な進路のデザイナー—	法学研究科	経済、工学、国際 公共、GLOCOL	8単位以上	M・D	
36	新設	基礎理化学計測学	理学研究科	産学連携本部(イノ ベーション部VBL)、 核物理研究センター	8単位以上	M・D	
37	新設	放射線科学	理学研究科	医学系、RI、核物、産研他	8単位以上	M・D	
38	新設	アントレプレナーシップ(スタンダード・プログラム)	経済学研究科	工学研究科	8単位以上	M・D	
39	新設	ソフトウェアイノベーション先導 [フィナンシャル・ソフトウェア・コース]	金融・保険教育 研究センター	情報科学研究科、(学外)国立 情報学研究所GRACEセンター	8単位以上	M・D	
40	新設	科学技術文明における公共倫理とソーシャル・イノベーション	国際公共政策研究科	CSCD	8単位以上	M・D	
41	新設	国際協力活動における公共倫理とソーシャル・イノベーション	国際公共政策研究科	GLOCOL	8単位以上	M・D	
42	新設	東南アジアにおける平和と人間の安全保障	国際公共政策研究科	人間、薬学、言文、GLOCOL	8単位以上	M・D	

※履修対象者 B5、6・・・6年制課程の学部（医学部・歯学部・薬学部）の5、6年次
M・・・博士前期課程・修士課程・生命機能研究科の博士課程1、2年次・法科大学院の課程
D・・・博士後期課程・博士課程・生命機能研究科の博士課程3年次以上

平成24年度 大学院科目等履修生高度プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案(幹事)部局	連携部局	修了要件 単位数	履修 対象者	履修期間
1	継続	アート・メディアロジー入門講座—理論と実践	文学研究科	CSCD	8単位以上	社会人	1年
2	継続	ビジネスリーダー人材育成基礎プログラム	経済学研究科	—	10単位以上	社会人 他大学 大学院生	2年
3	継続	健康医療問題解決能力の涵養 (旧: 医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養)	医学系研究科 (医科学専攻)	—	8単位以上	社会人	1年
4	継続	言語情報処理の手法と展開	言語文化研究科	—	8単位以上	社会人	1年
5	継続	インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流 センター	言文	8単位以上	社会人	1年
6	継続	金融・保険	金融・保険教育 研究センター	経済、理学、 基礎工、情報	8科目以上	社会人 他大学 大学院生	スタンダード・ プログラム:3年 アドバンスト・ プログラム:4年
7	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際 教育研究訓練プログラム (社会人教育)	ナノサイエンス デザイン教育研究 センター	理学、医学系、薬学、 工学、基礎工、生命、 産研、接合研、超高压、 極限、太陽、レーザー研	9単位以上	社会人	2年

平成24年度 大学院副専攻プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案(幹事)部局	連携部局	修了要件 単位数	履修 対象者
1	継続	認知脳システム学	基礎工学研究科	人間、医学系、工学	14単位 以上	M・D
2	継続	金融・保険	金融・保険教育 研究センター	経済、理学、基礎工、情報	8科目 以上	M・D
3	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研 究訓練プログラム (博士前期課程高度学際教育副専攻プログラム)	ナノサイエンス デザイン教育研究 センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎 工、生命、産研、接合研、超高压、 極限、太陽、レーザー研	14単位 以上	M
4	新設	アントレプレナーシップ (アドバンスト・プログラム)	経済学研究科	工学、国際、GLOCOL	14単位 以上	M・D

※履修対象者 M・・・博士前期課程・修士課程 (生命機能研究科は博士課程1・2年次)
D・・・博士後期課程・博士課程 (生命機能研究科は博士課程3年次以上)

研究・産学連携室

サイエンスカフェシリーズ「カフェ・オンザエッジ・ネクスト」を実施

大型教育研究プロジェクト支援室では、内閣府・日本学術振興会「最先端・次世代研究開発支援プログラム」(以下、次世代プログラム)の採択者に求められる「国民との科学・技術対話」(アウトリーチ)活動の支援を行っています。その一環として、10月7日(金)から「ラボカフェ」シリーズとして、京阪

電車中之島線「なにわ橋駅」地下1階コンコースのアートエリアB1(ピーワン)において、次世代プログラムに採択された大阪大学所属の研究者を招き、「カフェ・オンザエッジ・ネクスト〜最先端・次世代の科学者が見ているコト・モノ〜」と題して、合計7回のサイエンスカフェを実施しました。



10月7日(金)第1回 木田敏之(工学研究科准教授)
「有害を無害に変える植物の力・化学の力」



10月28日(金)第3回 中野貴由(工学研究科教授)
「骨の話をしよう。」

企画に当たっては、次世代プログラムに採択された25名全員の研究者を個別訪問し、それぞれの希望を取り入れることとし、最終的に日程の調整がついた7名の方の研究を紹介することができました。

のべ288名の参加者に行ったアンケート結果によると、日常生活の中では接する機会のない、第一線の研究者から直接話を聞いた点が一定の評価を得た一方、もっとじっくり話してみたいといった希望があることも窺えました。研究者からは、「専門家ではない方々と対話することが、学会発表などとは異なる刺激となり、よい経験をした」「コミュニケーションとプレゼンテーションの鍛錬になった」といった感想も得ています。

大型教育研究プロジェクト支援室では、これまで実施したサイエンスカフェのマニュアルをはじめとする対話型アウトリーチの実施ノウハウなどを提供

していますので、関心のある方は、支援室・支援事務室までお気軽にご連絡をお願いいたします。



11月30日(水)第7回 松崎典弥(工学研究科助教)、
狩野光伸(東京大学医学系研究科講師)
「プリンターで、細胞を、生きたまま印刷する」

	日時	タイトル、実施者(所属、役職)	参加人数
第1回	10月7日(金) 18:30 - 20:00	「有害を無害に変える植物の力・化学の力」 木田敏之(工学研究科准教授)	40人
第2回	10月19日(水) 18:30 - 20:00	「プラスチックで磁石、できるでしょうか?」 関修平(工学研究科教授)	39人
第3回	10月28日(金) 18:30 - 20:00	「骨の話をしよう。」 中野貴由(工学研究科教授)	51人
第4回	11月4日(金) 18:30 - 20:00	「ナノ世界の職人技を支える『自己組織化』」 柳田剛(産業科学研究所准教授)	33人
第5回	11月11日(金) 18:30 - 20:00	「縁の下の力持ち『細胞膜』が未来のものづくりを変える!」 馬越大(基礎工学研究科准教授)	37人
第6回	11月17日(木) 18:30 - 20:00	「免疫は微生物を必要としている? ～化学の目から見た身の回りの細菌と活性物質～」 藤本ゆかり(理学研究科准教授)	51人
第7回	11月30日(水) 18:30 - 20:30	「プリンターで、細胞を、生きたまま印刷する」 松崎典弥(工学研究科助教)	37人
計			288人

第2回日本学術振興会育志賞に本学から2名受賞

平成24年1月17日(火)に独立行政法人日本学術振興会より、第2回「日本学術振興会育志賞」の発表があり、本学からの推薦により医学系研究科の高原充佳さんが、また、錯体化学会からの推薦により基礎工学研究科の山本浩二さんの受賞がそれぞれ決定しました。

「日本学術振興会育志賞」は、我が国の学術研究の

発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士後期課程学生を顕彰することで、その勉学及び研究意欲を高め、若手研究者の養成を図ることを目的として天皇陛下の御下賜金をもとに平成22年度に創設されたものです。

授賞式は3月1日(木)に、日本学士院(東京都)において行われます。

人事労務室

「大阪大学総長顕彰」及び「大阪大学総長奨励賞」の制定について

このたび、本学では、その趣旨・対象者をより明確にすることにより、より一層本学の発展に期することを目的として、これまでの「大阪大学功績賞」を発展的に解消し、「大阪大学総長顕彰」及び「大阪大学総長奨励賞」を制定いたしました。

このうち、「大阪大学総長顕彰」は、「教育」、「研究」、「社会・国際貢献」又は「管理運営」の各分野での業績が特に顕著であると認められた者を顕彰するものです。

また、「大阪大学総長奨励賞」は、若手教員（概ね40歳以下の者をいう。）のうち、教育及び研究の業

績があると認められるなど、同分野で将来活躍することが期待される者を顕彰し、奨励するものです。

選考は、いずれについても年1回、毎年4月から3月までの業績を対象として、理事、総長補佐、部局長からの推薦に基づき、選考委員会において行います。

受賞者に対しては、表彰状のほか、副賞を授与することとし、毎年夏頃に表彰を執り行う予定としております。

このように、大学としては、優れた実績や能力等を示した方々に報いる制度等の設計に今後とも取り組んでまいりたいと考えております。

広報・社会学連携室

中之島センターのキャンセル料の取り扱いが変わります。

現在、中之島センターの利用に関して、予約の際にすでに仮押さえされている場合が多く、その多くがキャンセル料が発生する直前にキャンセルされるため、利用者にご不便をおかけしているケースが見られます。

このことから、より多くの皆様にご利用していただくために、利用のキャンセルについて見直し、ま

ず、利用申請から1週間以内をキャンセル料の発生しない「仮予約」期間とし、その間に「本予約」の申請をセンターに行ったのちにキャンセル料の発生する「本予約」とします。

詳しくは、中之島センターのHP (<http://www.onc.osaka-u.ac.jp/>) に掲載いたしますので、ご確認ください。

「大阪大学における新たな広報連携プラン」を策定しました。

前号号でお知らせしておりましたが、広報・社会学連携理事を座長とする広報連携プラン策定WGは、「『大阪大学における新たな広報連携プラン』～大阪大学ブランドの向上を目指して～」を策定し、12月26日(月)に開催された広報基盤整備本部会議において了承されました。

本プランは、本学事務機構の広報活動の現状について、①それぞれの事業主体が企画・立案を行っており、広報活動も各主体の責任に行われている。②全ての情報が広報部門に集約されておらず大阪大学として統一感のある効果的な広報活動が行えていない。③ソーシャルメディアを活用した広報手段の活用が大学全体としての取り組みには至っていない。と分析しています。その上で、広報活動を通じた「大阪大学ブランド」の向上のためには全学的な広報態勢を整理し、広報活動の効率化、集約化のための仕組みや、大学の広報活動の望ましい在り方を考えることの必要性を述べています。

本プランでは、具体的に、広報業務に関して、①

広報業務に特化した組織態勢を構築し、広報に関し全学に強い指導力を発揮できる広報企画ユニットを設置すること。②広報情報の集約システムを構築し、集約・分析・企画・実施を効率的に進めるサイクルを確立すること。を提言しています。これらにより、学内における効果的な広報戦略の策定が可能となり、広報すべき事業の掘り起こしや、統一的な広報戦略が可能となります。

これらのプロセスを進めるためには、広報態勢の整備と共に、抜本的な意識および組織改革が必要である。と本プランでは述べており、大阪大学を広く世界に知っていただくためには、大阪大学ファミリーが大学広報に対する責任感「広報マインド」を持ち、受け手の側に立った広報活動を実践する広報態勢づくりが重要となります。

今後も、広報ネットワークなどを通じて、本学の広報活動に関する情報を提供して参りますので、ご協力をお願いいたします。

阪大NOWの発行について

主に学内向け広報誌として、2カ月に1回発行している阪大NOWですが、広報・社学連携室で検討の結果、ホームページなどのWEBへ媒体の重点をシフトするとともに、経費削減の観点から、今号より配付数の見直しを行うこととさせていただきます。冊子での発行数は減少しますが、現在のPDF

による掲載（バックナンバー含む）のほか、電子書籍の方式導入を検討を進めることで、さらに見やすく、皆様に「大阪大学の今」を知っていただく広報誌を目指していきますので、今後ともよろしくお願いたします。

国際交流室

国際交流に関するアドバイザー・ボード意見交換会及び講演会を開催

1月20日(金)に、大阪大学にとって今後きわめて重要な課題となる「グローバル人材の育成」をテーマに、日本を代表するグローバル企業、パナソニック株式会社から人事グループ海外担当理事である西村博昭氏と、ソニー株式会社からグローバル人材開発部門採用部統括部長である米田牧子氏のお二人を、国際交流に関するアドバイザーボードのメンバーとしてお招きしました。

午前中の意見交換会では、まず高橋明理事・副学長から大阪大学のグローバル人材育成の取組について簡単な紹介がなされたあと、企業が求めるグローバル人材や社員のグローバル教育等について、西村氏と米田氏からそれぞれご紹介をいただきました。

西村氏は、パナソニックとして確固たる経営理念のもと世界中の社員が心をついに結集することの大切さを強調されました。さらにグローバル人材にとって必要な4つの要素として、「公平性・客観性をベースとした自らの座標軸を持つこと」「自ら考えて決断し、具体的な動きとして推進していくこと」「『違い』を受容し、自ら異なる環境に適応させること」そして「語学力とそれをベースにした意思疎通する力を持つこと」を挙げられました。

米田氏は、ソニーが従来から国籍を問わず採用を行ってきたことから、これまで外国籍社員の比率などを外部から質問されても答えようがなかったというエピソードなどを紹介した後、日本の学生が内向きといわれがちであるが、採用の現場にいると必ずしもそのような印象はもっておらず、むしろ積極的に外に目を向けている若い人たちとの間で二極化されているとの印象が述べられました。

お二人とも強調されていたことは、若い間のミスは企業としてそれをもってただちにマイナス評価とはしないこと、結果よりも、プロセスを重視すること、勇気を持ってチャレンジする精神が大切なことを繰り返しお話になりました。

午後からの留学生を含む学生を対象とした講演では、米田氏から「あなたは世界を変えようと思ったことがありますか。」と学生諸君に語りかけられ、そ

れに対して数人の学生から「はい」との返事があり、「さすがは阪大生ですね。」というおほめの言葉もありました。

西村氏への質問では、留学生から、上司が職場に残っていると若い社員が帰宅しづらい雰囲気がありますか、との質問に、「そういうことはありません。」と西村氏が苦笑されるという場面もありました。

最初に述べました、日本が果たさなければならない大きな課題であるグローバル人材の育成について、世界の激烈な競争の中で戦っているパナソニックとソニーという二つの企業が、同じグローバル企業でありながら、その社風からくる発想や試みに違いがあること、しかしその違いは違いとして、若い人材には失敗を恐れずチャレンジする精神を求め、かつ育てようとしていることなど、お二人の企業人のお話を聞くことで、多くのことを学ぶことができました。学生諸君のみならず、われわれ人材育成に関わる教職員にとっても、印象深い講演会だったと思います。

大阪大学だからこそ育てることのできる特長を持つ人材でありながら、一方で、一人ひとりの学生の個性を尊重すること、そして教育研究の世界標準を意識しつつも、全体としての多様性を大切にすることが、これからともに求められていることを痛感した一日でした。講師としておいでいただいた西村氏と米田氏にはあらためてこの場をお借りしてお礼を申し上げます。



活発な議論が交わされた意見交換会



創立80周年記念事業



原点へ 未来へ

大阪大学は2011年に創立80周年を迎えます



The 4th International Symposium on Atomically Controlled Fabrication Technology

大阪大学グローバル COE プログラム「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」では、「The 4th International Symposium on Atomically Controlled Fabrication Technology」を、10月31日(月)～11月2日(水)の日程で大阪大学中之島センターにおいて開催しました。本GCOE拠点の国際シンポジウムとして第4回目となり、また今回は大阪大学創立80周年記念国際シンポジウムシリーズの一つとして位置づけられています。本シンポジウムでは、原子スケールで制御された生産技術の最先端に関して、生産技術にとどまらない幅広い研究者が集い活発な議論が展開されました。一方で、スチューデントセッションと名付けた講演セッションでは博士後期課程学生による16件の口頭発表を行い、例年を大幅に上回る104件のポスター発表とともに、学生を中心に熱気のある議論・意見交換が行われました。



シンポジウム参加者による集合写真

(グローバル COE プログラム
「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」)

The 4th Global COE International Symposium on Physiome and Systems Biology for Integrated Life Sciences and Predictive Medicine

大阪大学グローバル COE プログラム「医・工・情報学融合による予測医学基盤」における最終シンポジウムとして、11月21日(月)～23日(水)にかけて、千里阪急ホテル・千里ライフサイエンスセンターにおいて、第4回グローバル COE 国際シンポジウム「The 4th Global COE International Symposium on Physiome and Systems Biology for Integrated Life Sciences and Predictive Medicine」を開催しました。今回のシンポジウムは、創立80周年記念国際シンポジウムシリーズと位置づけられ、本プログラム活動の集大成として、世界各国から当該研究分野の第一線で活躍する研究者を招待し講演をいただきました。また、若手教員・若手研究者だけでなく、博士課程後期学生をも含めた研究者間の活発な議論が行

われました(3日間の会期で国内外を合わせて34名の招待講演、38件のポスター発表を実施。参加者総数は154名)。



(グローバル COE プログラム
「医・工・情報学融合による予測医学基盤」)

平成23年度冬季における大阪大学節電・省エネ計画 ー阪大節電スタイルー

今夏に引き続き、関西電力管内の電力需給状況が大変厳しくなると見込まれるため、政府及び関西電力株式会社より、今冬の平日における10%以上の節電について依頼がありました。これを受けて、本学では平成23年度冬季における節電・省エネ計画に基づいて、全てのキャンパスで取り組みを実施しています。

■ 計画期間はいつ？

平成23年12月1日から平成24年3月31日の午前9時から午後9時までです。

■ 目標値はどのくらい？

キャンパス毎に、昨年同月の最大使用電力に比べ10%削減を目標にしています。(附属病院については、本計画の対象外としますが、医療業務等に支障のない範囲で節電をお願いしています。)

■ 具体的な節電・省エネ対策は？

「冬季節電・省エネ計画事項」の各アイテムを実施して

います。各キャンパスで設定した削減目標を達成できるよう、努力をお願いしています。

■ Levelの違いは？

Level 1 → 計画期間中に常時実施するアイテムです。

Level 2 → 各キャンパスの削減目標が達成困難な場合に、実施するアイテムです。実施については、環境・エネルギー管理部より、各キャンパスに通知します。

Level 3 → 監督官庁から緊急節電要請等を受けた場合に実施するアイテムです。実施については、要請等を受けた後、環境・エネルギー管理部より全学に通知します。

冬季節電・省エネ計画事項

計画 Level	主な節電対応内容
Level 1	【建物の空調・照明等】 ○室温20℃を目安に空調機の暖房温度を調整 ○空調機フィルターの清掃 ○日没時は屋外の冷気を遮断するため、カーテン等の活用を行う ○エアータオルの停止 ○暖房便座の使用自粛 ○執務室等での個別電気ヒーター等の使用自粛 ○執務室等での電熱式加湿器の使用自粛 ○サーバー室など冬季も冷房が必要な場所の外気の活用 ○執務室・研究室など照明を業務に支障のない範囲の間引き ○廊下照明の間引き ○昼休みの照明の消灯 ○スイッチ付近に消し忘れシールの貼付 ○自動販売機の照明OFFおよび保温時間等の短縮 ○講義室など使用していない室の照明・空調のOFF ○講義室など長時間使用しない部屋の施錠の徹底 ○OA機器等の待機電力の抑制 ・パソコン省エネモードの設定の徹底 ・離席時のパソコンディスプレイの電源OFF ・終業時のパソコン、プリンター、OA機器、TV等の主電源OFFを徹底 ・不在時の保温ポットの電源OFF ○ポスター掲示による節電の定着 ○エレベーターの間引き運転 ○医学部附属病院の発電機のピークカット運転 【ワークスタイル】 ○ウォームビズの励行 ・保温性のあるインナー等の着用 ・室内で羽織れる上着やひざ掛け及び重ね着の活用 【教育研究】 ○実験用冷蔵庫等の整理・集約化 ○不使用時の実験機器等の可能な限り電源の停止



計画Level	主な節電対応内容
Level2	【建物の空調・照明等】 ○空調機を就業時間外の一時停止（健康にできるだけ留意して行うこと） ○暖房便座の使用禁止 ○執務室等での個別電気ヒーター等の使用禁止 ○執務室等での電熱式加湿器の使用禁止 ○電気ポットの使用禁止
Level3	【建物の空調・照明等】 【教育研究】 ○停止可能な実験の中止 ○停止可能なサーバー等コンピューターの停止 ○事務室・研究室等の空調機の停止

上記以外でも、各部局で可能なアイテムを実施し、さらに部局内で省エネ方策の議論を行い、独自の方策があれば積極的に実施するようお願いします。さらに、部局独自に行う方策で有効なものがあれば全学的に実施することを検討していますので、環境・エネルギー管理部までご連絡ください。

計画期間が年度末の卒業研究等で繁忙な時期と重なっていることもあり、教育・研究活動にできるだけ支障の出ることの無いよう、工夫や努力で可能となる方策を実施し、各アイテムについては、各部局において責任者を決めて実施してください。

環境・エネルギー管理部では、省エネ節電効果を担保するため、チェックシートを活用した部局毎の実施状況を定期的に確認するとともに、昨年導入した電力可視化システムを活用して実施状況を随時検証し、部局にフィードバックし、タイムリーにフォローを行います。

教職員だけでなく学生のみなさんにも、大阪大学の構成員として理解とご協力をお願いします。

なお、各アイテム実施の際には、事務所衛生基準規則等、安全・衛生面に十分配慮して行ってください。

■ 1月の結果は？

吹田・箕面キャンパスについては、目標である10%削減を達成することができました。

豊中キャンパスについては、ほぼ削減目標を達成していますが、1月については4日間達成できなかった日がありました。

■ 冬季における大阪大学節電・省エネ計画の後は？

大阪大学は最先端の大規模研究施設を多数有する大学であり、施設の増床・教育研究活動の高度化に伴いエネルギー消費が年々増加する傾向にあります。よって、今後も計画的に節電・省エネを実施しなければなりません。今年



全学へ掲示依頼しているウォームビズポスター

度のような大きな我慢を強いる節電にならないよう、大学全体で取り組み可能な対策を検討中です。

■ 環境・エネルギー管理部ってどんなところ？

大阪大学のエネルギー消費を管理し、法的、社会的責任として、エネルギーの使用の合理化及び、温室効果ガスの排出抑制に向けて取り組みを進めています。

■ 環境・エネルギー管理部よりお願い

省エネを心がけて、無駄なエネルギーは使わないようにしましょう。一人ひとりの小さな省エネが大きな省エネにつながる重要ポイントです！

皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

エネルギー（節電）のチェックは、電力可視化システムを活用してください。

電力可視化システム（学内専用）

「マイハンダイ」にログイン→「学内使用電力」から確認することができます。

⇒ <https://my.osaka-u.ac.jp>

【省エネ・節電に関する連絡先】

大阪大学環境・エネルギー管理部（本部棟4階）

TEL：06-6879-4883 FAX：06-6879-7138 E-mail：kankyou-kikaku@office.osaka-u.ac.jp

平成23年度 国公立大学附属病院医療安全セミナー

医学部附属病院中央クオリティマネジメント部では、6月28日(火)～30日(木)までの3日間にわたり、「国公立大学附属病院医療安全セミナー」(文部科学省後援)を開催しました。

今年度は全国100大学附属病院から計238名の参加があり、玉上晃文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長、渡辺真俊厚生労働省医政局総務課医療安全推進室長をはじめとする総勢14名の講師を迎え、最新の医療安全の知見について学習しました。

「ノンテクニカルスキルの実践とトレーニング」のセッションでは、上田裕一教授(名古屋大学大学院医学系研究科)による基調講演の後、座長の任和子教授(京都大学大学院医学系研究科)、中島和江病院教授(大阪大学医学部附属病院中央クオリティマネジメント部)の進行により、講師の庄子由美副看護部長(東北大学病院)らとともに、ノンテクニカルスキルのトレーニングや教材開発の実践に関するパネルディスカッションを行いました。

その他、「医療安全とヒューマンファクター」に関する重要なテーマを多数盛り込み、参加者からは、「人間の特性を踏まえた医療安全対策が必要であると思った」、「医療安全教育についてヒントを得ることができた」等の感想が寄せられ、好評のうちに終了しました。

(医学部附属病院)



第27回 湯川記念講演会

10月9日(日)、中之島センターで、総合学術博物館湯川記念室主催、日本物理学会大阪支部共催による第27回湯川記念講演会が開催され、幅広い年齢層の200人以上の方々が参加されました。

東京大学大学院理学系研究科小林富雄教授が、『巨大加速器LHCで見る素粒子の世界』と題し、スイスの巨大加速器LHCの実験で、近々発見が予想されるヒッグス粒子のことなど分かりやすく解説され、次に、本学理学研究科土山明教授が『「はやぶさ」の見たもの、採ってきたもの』と題し、「はやぶさ」が持ち帰った岩石の分析から判明しつつあることなどを興味深く解説されました。

(総合学術博物館湯川記念室)



台湾・国立成功大学80周年記念ハーフマラソンリレーに参加

本学と大学間学術交流協定を締結している国立成功大学が、10月30日(日)に、台湾の台南市にて「国立成功大学80周年記念ハーフマラソンリレー」を開催しました。

本学からは陸上部の基礎工学部4年上田 智広さん、外国語学部2年藤沢裕理子さん、医学部4年益岡 佑季さん、法学部2年田邊 邦裕さん(名前は走者順)が参加しました。

アジア各国から34チームが参加する中、本学は5位入賞という好成績を収め、参加選手からは、「はじめは緊張もあったが、全チームに対する暖かい応援の中、とにかく楽しく走れた」、「言語が異なる人々と、マラソンを通じ感動を分かち合えたと同時に、英語によるコミュニケーションの必要性も実感し、大変有意義であった」との感想が寄せられました。

(詳しくは国際交流室HP <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/event.html> をご覧ください。)

(国際交流オフィス国際交流課)



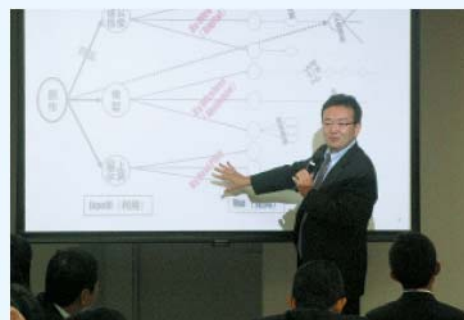
総長、国際交流室長へ入賞を報告

知的財産センター・法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科共催 公開講義「今後の日本と産業政策のあり方 ～阪大生へのメッセージ～」

11月7日(月)、知的財産センター、法学研究科附属法政実務連携センター、及び高等司法研究科では、経済産業省資源エネルギー庁新エネルギー対策課長村上敬亮氏をお迎えして、公開講義「今後の日本と産業政策のあり方～阪大生へのメッセージ～」を開催しました。

当日は、これまでの政策の企画立案を通じて得られた氏のご経験を踏まえて、今後、わが国の目指すべき姿についてお話しいただきました。

(知的財産センター、法学研究科・法学部、高等司法研究科)



村上敬亮氏による講義の様子

高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター共催 税法講演会「税務行政の現状と課題」

11月8日(火)、高等司法研究科及び法学研究科附属法政実務連携センターでは、大阪国税局課税第二部長村松洋介氏をお迎えし、公開講演会を開催しました。当日は、「税を考える週間(11月11日～17日)」が始まることも踏まえ、法人税の概要、税の役割と税務署の仕事についてご講演いただきました。

学生が社会人としての自覚を持ち、税制の現状を理解し、日本を支える税制のあるべき姿について考える貴重な機会となりました。

(高等司法研究科、法学研究科・法学部)



文学研究科 平成23年度研究教育フォーラム開催

文学研究科では、毎年、研究教育フォーラムを開催しています。同フォーラムには名誉教授も招き、研究発表後の懇親会開催とあわせて、研究交流を促進するコミュニケーションの場ともなっています。

今年は、11月17日(木)、清水康次教授(文学環境論)と森安孝夫教授(東洋史学)による研究報告が行われ、約50名の参加者は熱心に聴講し、活発な質疑応答が行われました。

その後の懇親会では、名誉教授を含めて30名あまりの参加があり、盛会のうちに終了しました。

(文学研究科・文学部)



参加者からの質問に答える森安教授

IFReC / IPR 合同国際ワークショップを開催

免疫学フロンティア研究センター(WPI-IFReC)と蛋白質研究所(IPR)の合同ワークショップ"IFReC / IPR Joint Seminar Multilevel Systems Biology: Genomes, Structures, and Networks"が11月16日(水)～17日(木)に微生物研究所谷口記念講堂で開催されました。今回のワークショップでは、国内外の第一線のシステムバイオロジー研究者を中心に講演者として招き、活発な討議とともに交流を深めました。

(免疫学フロンティア研究センター、蛋白質研究所)



会場での討論風景

第8回 共通教育フォーラム実施

11月18日(金)に、第8回共通教育フォーラムを大学教育実践センター・スチューデントコモンズにおいて開催しました。立命館大学の沖裕貴教授に「FDの見える化と分かりやすいシラバス」という題でご講演頂き、出席者は26名でした。

講演では、現在の高等教育政策におけるFDと教育改革の全国的動向について説明があり、DP(ディプロマ・ポリシー)、CP(カリキュラム・ポリシー)を作成し、達成状況のチェックすることが重要となっていること、また、シラバスもこれらに応じて作成することが必要であることなどが強調されました。(大学教育実践センター)



平成23年度 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議開催

日本語日本文化教育センターでは、11月18日(金)に千里阪急ホテル「仙寿の間」において日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議を開催しました。

本会議は、毎年、本センターが主催し、今年で17回目を迎えるものです。特に今年度は文部科学省から松尾泰樹学生・留学生課長もお招きし、本学も含め58の教育研究機関から総勢100名もの関係者が参加し開催されました。

会議では、文部科学省から昨今の留学生教育事情や今後の日本語・日本文化研修留学生制度について詳細な説明が行われた後、各参加大学との質疑応答が続き、今後の日本語・日本文化研修留学生制度の更なる発展に向けた活発な意見交換が行われました。(日本語日本文化教育センター)



最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2011

高校生を対象に、最先端の物理を分かり易く講義し、実験や施設見学、研究室訪問も取り入れ、物理や科学に対する興味を引き出そうとするプロジェクト、「最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2011」が、総合学術博物館湯川記念室の主催、理学、工学、基礎工学各研究科、大学教育実践センター、核物理研究センター、レーザーエネルギー学研究センターの共催で、10月15日(土)～11月19日(土)までの6週にわたり、理学部D501等で開催され、合計192名が参加しました。

最後日には、参加者中4回以上出席した145名に東島清理事・副学長より修了証書が授与されました。(総合学術博物館湯川記念室)



学生支援ステーション 「Station Café (第5回)」開催

学生支援ステーションでは、11月14日(月)と21日(月)にわたり、第5回 Station Café「言葉のない世界を味わおう!～Fantasy Group」を開催しました。Fantasy Groupは、少人数のグループで一枚の大きな画用紙にフィンガーペインティングとコラージュを用い「沈黙のまま行こう」ことで、人間関係や感受性のトレーニングに用いられています。参加者は、言葉のない世界が絵によって表現される様々な「声」によって満ち満ちてくるのを体験し、最後にはとても趣きのある作品が出来上がりました。

(学生支援ステーション/学生・キャリア支援課)



完成したコラージュ作品

学生支援ステーション 「Station Café（第6回）」開催

学生支援ステーションは、12月2日（金）、関西地域で折り紙の普及を目的として活動する京都学生折り紙サークルから講師を招き、第6回学生支援ステーション Station Café「折り紙にチャレンジ！～with 京都学生折り紙サークル～」を開催しました。

お互いに教え合ったり、同じ折り方でも折り手の個性が出る作品を見比べて感想を述べ合ったりするなど、学生同士の交流がなされました。一つの紙から広がる折り紙の世界の奥深さを体験し、他の人にも教えたいという感想も多く、さらに交流の輪が広がることを予感させる機会となりました。

（学生支援ステーション／学生・キャリア支援課）



講師の手元に集まる視線

文学研究科・文学部 ハラスメント防止に関する教職員研修会開催

文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会が、11月24日（木）に、文学研究科本館 2F の大会議室において開かれました。講師としてお招きした豊中地区アカデミック・パワー等ハラスメント相談室の座古勝相談員から「アカデミックハラスメント及びパワーハラスメントの現状と対策について」という題目でご講演いただいた後、熱心な質疑応答が行われました。

（文学研究科・文学部）



座古相談員による講演

消防訓練実施

11月25日（金）に、文学研究科、法学研究科、経済学研究科、国際公共政策研究科、高等司法研究科、総合学術博物館、財務部豊中調達センター、保健センター及び大学教育実践センターの合同により、消防訓練を行いました。教職員及び学生等約70名が参加し、防災教育DVDを視聴した後、水消火器による初期消火訓練を行いました。

（文学研究科・文学部）



初期消火訓練を行う片山剛文学研究科長

スウェーデン・アカデミー会員による特別講義 “The Work on the Nobel Prize in Literature”

11月30日（水）に、世界言語研究センターの高橋美恵子・石黒暢准教授が担当する国際教養科目「欧米の文化と社会を知る－北欧事情概説」の一環として、Bo Ralph 氏（スウェーデン・アカデミー会員、イエーテボリ大学（本学協定校）スウェーデン語学科教授）をお迎えして、特別講義を開催しました。10数年もノーベル文学賞選考に直接携わっていらっしゃる氏の講義はまたとない貴重な機会で、160名に上の参加者が熱心に耳を傾けていました。

（世界言語研究センター）



Ralph氏の講義を熱心に聞く受講者

学際融合教育シンポジウム開催

12月2日(金)、銀杏会館において、学際融合教育シンポジウム「変革の時代における大学院での学び ―複眼的視野と学際的視点の涵養―」を開催しました。本シンポジウムでは、大学院での高度な学びについて、筑波大学大学院の白岩善博教授、本学学際融合教育研究センターの中西浩特任教授による講演の後、大学院等高度副プログラムを受講した修了生(社会人)や受講中の大学院生による講演が行われました。シンポジウム後半には、パネルディスカッションも行われ、今回は教職員、学生合わせて80名以上の参加者がありました。

(学際融合教育研究センター)



パネルディスカッションの様子

公開講座「くすりと医療」開催

平成23年度大学院薬学研究科公開講座が、11月26日(土)、12月3日(土)の2日間にわたって本研究科薬学2号館4階特別講義室を会場として開催されました。

澤井弘行先生(沢井製薬株式会社代表取締役会長・日本ジェネリック製薬協会会長)など各方面の最前線でご活躍の6名の先生方により講演が行われ、薬剤師を中心に、幅広い年代層にわたる約100名が受講しました。

また、終了後のアンケートでは、内容が高く評価され、今後の本講座への強い期待が寄せられました。

(薬学研究科・薬学部)



理学研究科

外国人留学生懇親パーティー開催

理学研究科外国人留学生パーティーが、12月2日(金)に外国人留学生、外国人研究者、チューター学生等114名が参加し、豊中キャンパスの福利センターで開催されました。

浦川理留学生担当教員の司会のもと、原田明評議員の挨拶、北村公一豊中ロータリークラブ会長の挨拶に続き、留学生のフランコ・フランシスコ君の乾杯の発声で開始しました。

女性職員有志によるハンドベル演奏のほか、和太鼓の演奏では留学生も参加し、楽しい雰囲気の中、お互いに懇親を深めることができました。

滝澤温彦副研究科長の閉会挨拶の後、抽選でプレゼントを受け取り、名残を惜しみつつ散会となりました。

(理学研究科・理学部)



Symposium on EU-Japan Collaboration in Education, Research and Exchanges - Brussels, 2011

12月6日(火)、ブリュッセルの欧州委員会ビルで「ITP/大航海プログラム/ICIECPシンポジウム」が開催されました。第一部ではヨーロッパや日本に留学経験がある若手研究者の報告とそれぞれの指導教員の講演があり、第二部では欧州委員会担当者から欧州側のプログラム説明等や、神戸大学ブリュッセルオフィス、欧州留学同窓会組織であるOCEANS Network、グローニンゲン大学、JSPSボンセンターそれぞれの代表者から、また、本学から高橋明理事、弘津慎彦グローニンゲン教育研究センター長、荻原哲名誉教授の講演があり、第三部の国際交流等についてのディスカッションに続き、レセプションでも活発な意見交換が行われ、有意義なシンポジウムとなりました。

(理学研究科・理学部)



第1回 大阪大学マネジメント研修を実施

11月22日(火)、12月6日(火)、大阪大学会館にて第1回大阪大学マネジメント研修が開催されました。本研修は、大学のミッションとそれを踏まえた経営戦略を明らかにするための方策を学ぶことにより、大学マネジメントの一翼を担う人材を育成することを目的に実施しました。PricewaterhouseCoopers(株)より講師をお招きし、SWOT分析、バランススコアカードにつき、それぞれ講義、グループ・個人検討、発表を繰り返す形式で進めました。参加者23名は異なる職務内容からの多様な視点によって、活発な議論を行うことができました。受講後のアンケートでは前向きな意見が多く、有意義な研修となりました。(総務企画部総長秘書室)



グループワーク (SWOT分析) の成果発表

「着物体験教室」開催

文学研究科・文学部では、12月8日(木)に文学部大会議室においてボランティアの方々のご尽力で「着物体験教室」を開催しました。

参加した約20名の留学生にとって、本格的な着付けは初めての経験で、足袋に履き換え、徐々に体を締め付けられるきつさに驚いていましたが、華やかな振り袖姿が完成すると歓声を上げ、お互いに写真を撮り合っていました。

6名のボランティアの方々は予定時間を延長してご対応下さいました。ここに御礼申し上げます。

(文学研究科・文学部)



体験教室への参加者

「科学研究費助成事業実務担当者向け説明会」に約60名が参加

12月9日(金)、吹田、豊中の2地区で、科研費に係る事務手続きや執行上の注意点などの実践的な内容についての説明会を昨年に引き続き開催し、約60名の実務担当者が参加しました。

説明会では、研究推進課学術研究推進係から、平成23年度に新設された学術研究助成基金助成金と従来からの科学研究費補助金の制度の概要や手続き等について対比させて説明し、不正使用防止計画推進室から、科研費の執行に関する問合せ事例について説明を行いました。

今後も、部局と研究推進課で積極的に情報共有を行うことにより、共にスキルアップし、業務の効率化を目指します。

(研究推進部研究推進課)



人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が、12月9日(金)にコンベンションセンター会議室1で開催されました。本学では、人権問題啓発行事の一環として、例年7月と12月に講演会を開催しており、12月は人権週間にあわせて開催したものです。

今回は、基本的人権をテーマとして、講師に大阪市立大学創造都市研究科の阿久澤麻理子教授を迎え、「人権——自分の権利を学ぶことの意味」と題してご講演いただきました。

講演会では、人権の定義や権利についてなど、様々な視点からお話いただき、当日参加した約70名の教職員・学生は最後まで熱心に聴講し、人権問題に関する認識を深めました。また、講演終了後には活発な質疑応答が行われ大変有意義な講演会となりました。(総務企画部総務課)



阿久澤教授による講義の様子

男女共同参画シンポジウム

「男女がともにいきいきと働けるキャンパスを目指して」開催

多様な人材活用推進本部及び男女共同参画推進オフィスは、12月12日(月)にコンベンションセンターで、大阪大学第5回男女共同参画シンポジウム「男女がともにいきいきと働けるキャンパスを目指して」を開催しました。本学教職員や学生、他大学の関係者など、約100名の参加がありました。

基調講演として、沖縄科学技術大学院大学久保真季副学長にご講演いただき、さらに、パネル討論会では、研究支援員制度や保育園を利用しながら働く現状などについて、参加者も交えて活発な討論がなされ、「男女共同参画」への関心の高さが伺われるものとなりました。(総務企画部 多様な人材活用推進支援室)



久保沖縄科学技術大学院大学副学長による基調講演

「第13回理学懇話会」開催

理学研究科・理学部では12月15日(木)、理学研究科及び中之島センターにおいて第13回理学懇話会を開催しました。

理学懇話会は、理学部・理学研究科の活動を広く知ってもらうことを目的として企業のなかで活躍している理学研究科・理学部の同窓生を学外委員としてお招きするとともに、大阪大学理学研究科元教員にもゲスト委員として参加いただきました。

はじめに、理学研究科・理学部の現況が報告され、続いて10月1日に発足した基礎理学プロジェクト研究センターの概要説明・研究紹介及び理学研究科・理学部の教育、研究、国際交流、社会貢献についてプレゼンテーションが行われ、総合討論では、助言・要望等、活発な意見交換が行われました。今後の理学研究科・理学部の発展に有意義なものとなりました。(理学研究科・理学部)



歯学部附属病院

「第12回年末ふれあいコンサート」を開催

歯学部附属病院、弓倉記念ホールで12月16日(金)に恒例行事「年末ふれあいコンサート」が開催されました。会場には入院患者さんやご家族、外来の患者さんなど多くの方が集まり、和やかな雰囲気の中、トナカイ、サンタなどに扮した歯科医師の司会で幕が上がりました。ダンス、ジャグリングショー、ハープ演奏、人形劇や紙芝居、手話による歌など多彩な出し物に、患者さんからは、「いろいろなことが思い出されて、今喜べるようになったことを思い涙が出てきました」「忙しい先生たちがこのような催しを実施してくれて嬉しい」などの感想が聞かれました。最後は「見上げてごらん夜の星を」を全員で斉唱し、今年度のコンサートの幕を閉じました。

このコンサートが、患者さんの心を少しでも癒すことができ、職員とのふれあいの場になっていることを実感したひとときでした。(歯学部附属病院)



「見上げてごらん夜の星を」を全員で斉唱

法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科・知的財産センター主催(協力:関西経済連合会・大阪商工会議所) 公開講義「環境・エネルギー・法実務～ビジネスローの最前線」

12月16日(金)、関西経済連合会・大阪商工会議所の協力の下、弁護士武川丈士氏をお迎えして、豊中キャンパスと中之島センターとのTV会議システムによる同時中継により、公開講義「環境・エネルギー・法実務～ビジネスローの最前線」を開催しました。環境省「国内排出量取引制度の法的課題に関する検討委員会」委員としてのご経験等を基に、法制度構築の際に発生する実務上の問題について、立法政策上の観点を中心に詳しくお話いただきました。

(法学研究科・法学部、高等司法研究科、知的財産センター)



附属図書館

年末特別企画「図“笑”館寄席」を開催

附属図書館では年末特別企画として「図“笑”館寄席」と銘打った落語会を12月19日(月)に開催し、会場には71名が訪れました。第1部では社会人3名と落語研究部の学生2名による落語の競演、第2部では落語研究部の学生による大喜利、と盛りだくさんの2時間。いずれ劣らぬ熱演に、聴衆からは、「自分も演じてみたくなった」など、好意的な感想が寄せられたほか、「定期的に開催してほしい」と次回を期待する声も聞かれました。

(附属図書館)



社会人アマチュア落語家による熱演

早朝、人々が阪大坂下の玉坂公園に集う。目的はただひとつ。

阪大坂を駆け上がり、今年の「あびす男」の座を勝ち取るためである。

あびす男選り@阪大坂2012

1月8日(日)、今年で6回目の開催となる「あびす男選り@阪大坂」を開催しました。これは石橋商店街をはじめとする地域と阪大の交流を企画して始まりました。石橋商店街有志と経済学研究科松村ゼミによって運営が続けられ、今では地域の方にも親しまれるイベントとなっています。

自らの脚力と運を試すもよし、商店街の方々との交流を楽しむもよし。あびす男選り実行委員会は皆様の次回参加をお待ちしています！

(あびす男選り@阪大坂 2012 実行委員会)



在阪道各社と大阪大学との新年懇談会開催

1月12日(木)中之島センターにおいて、本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的とした「在阪報道関係の皆様との新年懇談会」を実施しました。

懇談会には、本学からは平野俊夫総長をはじめ、各理事、監事及び総長補佐等が、報道関係からは10社から19名の出席がありました。平野総長から、2012年の「大阪大学

の取り組み」について説明があった後、報道各社との意見交換が行われました。

懇談会では、大学・科学記者クラブ主幹事社である産経新聞社の発声により乾杯が行われ、懇談会に引き続き本学関係者と報道各社の方々の活発な情報交換が行われ、貴重な機会となりました。

(広報・社学連携オフィス広報・社学連携事務局)



懇談会の様子



平野総長による説明



情報交換を行う平野総長

日韓ロー・スクール交流

1月16日(月)から18日(水)、高等司法研究科では、韓国忠南大学校の公式訪問を受けました(教員2名、学生10名)。訪問団は、大阪地方裁判所での裁判員裁判の傍聴、本研究科での模擬授業・見学、教員・学生との交歓会を通じて、日本の司法制度、ロースクール制度の現状と問題点について認識を深めました。日韓でほぼ同時期に行われた司法制度改革の比較検証を行う共同研究の貴重な機会として、こうしたロースクール間交流を深めていきたいと考えます。

(高等司法研究科)



バンコク同窓会を開催

大阪大学バンコク教育研究センターでは、大阪大学・咲耶会合同バンコク同窓会を1月21日(土)にバンコクのグランドミレニアムスクンビット(ホテル)で開催しました。洪水の後でしたが55名のタイ人元留学生と日本人同窓生が集まりました。高橋国際担当理事・副学長からのビデオメッセージと新学長・理事の紹介から始まりました。また、旭日中授章を受けられた Prayoon Shiowattana 氏に花束が贈られました。

(国際交流オフィス国際交流課)



参加者による記念撮影

総長等への表敬訪問

フィンランド・ユヴァスキュラ大学御一行の表敬訪問について

11月14日(月)、Prof.AINO SALLINEN 学長等ユヴァスキュラ大学御一行が、平野俊夫総長を表敬訪問されました。本学からは、高橋 明理事・副学長、核物理研究センター岸本忠史センター長、同中野貴志教授、理学研究科滝澤温彦教授、向井弘志国際交流課長が同席し、両大学がそれぞれ強化を目指す国際教育プログラムについて意見交換が行われました。



【前列中央右】Prof.AINO SALLINEN(ユヴァスキュラ大学学長)
【 〆 左】平野総長

英国・ブリストル大学 Academic Registrar の表敬訪問について

11月14日(月)、このたびブリストル大学 Academic Registrar に就任された Dr. Robert Partridge 氏が、高橋 明理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは、国際教育交流センター近藤佐知彦教授、人間科学研究科山本ベバリー准教授、辻 敏彦学生交流推進課係長が同席し、将来的に大学間協定の締結を視野に入れた両大学間の学術・研究交流の可能性について意見交換が行われました。



記念品の交換を行うDr.Robert Partridge氏と
高橋理事・副学長

外務省関西担当大使の表敬訪問について

11月22日(火)、2011年8月に着任された楠本祐一関西担当大使が、平野俊夫総長を表敬訪問されました。本学からは、高橋 明理事・副学長、国際公共政策研究科星野俊也研究科長、向井弘志国際交流課長が同席し、楠本大使からは「日本の高度な科学技術力について、なかでも関西にある大学などの研究機関が取り組んでいる研究体制の魅力について、今後国内外に強くアピールしていきたい」とのご意見があり、主に日本の研究面についての懇談が行われました。その後、楠本大使は国際教育交流センター内サポートオフィスならびにIRISを訪問し、海外からの学生、研究者に対するサポート体制について説明を受けられました。



【前列左】楠本関西担当大使
【◇ 右】平野総長

スウェーデン・イエーテボリ大学教授、准教授の表敬訪問について

11月30日(水)、イエーテボリ大学 Prof. Bo Ralph と Assist. Prof. Anna Helga Hannesdottir が、平野俊夫総長を表敬訪問されました。本学からは、高橋 明理事・副学長、世界言語研究センター清水育男教授、同高橋美恵子准教授、向井弘志国際交流課長が同席し、日本の国立大学として唯一行われている本学のスウェーデン語教育について懇談が行われました。また、Prof.Bo Ralph が兼任するスウェーデン・アカデミーはノーベル文学賞の選考に深く関わっており、アカデミーの仕組みについてもご説明をいただきました。



記念品の交換を行うProf.Bo Ralph (左)と平野総長

中国・上海外国語大学副学長、院長の表敬訪問について

12月2日(金)、上海外国語大学楊 力副学長と同日本文化経済学院許 慈恵院長が、高橋 明理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは向井弘志国際交流課長が同席し、先方から強く希望のあった、日本学(語学・文学)を中心とした両大学間の学生交流について、意見交換が行われました。



【中央】記念品を受け取る高橋理事・副学長
【右】楊副学長 【左】許院長

スウェーデン大使館・科学技術参事官の表敬訪問について

12月16日(金)、スウェーデン大使館科学技術参事官 Prof. Anders Karlsson が、平野俊夫総長を表敬訪問されました。本学からは、相本三郎理事・副学長、馬場章夫理事・副学長、高橋 明理事・副学長、上地一義夫財務課長、土井一大輔研究推進課長、向井弘志国際交流課長が同席し、学生及び教員の交流の活性化などを含めた本学とスウェーデンの大学間の学術交流のさらなる拡大を目指して意見交換が行われました。その後参事官は、フォトリクス先端融合研究センター、産学連携本部、臨床医工学融合研究教育センターの関係者と懇談を行い、それぞれが取り組んでいる研究プログラムについての説明を受けられました。



【前列左】Prof. Anders Karlsson
【◇ 右】平野総長

アゴラとしての大学 — 新しい学問と教育、国際性、社会との交わりのために —

大学院理学研究科教授 荻原 哲

戦後間もない小学校で「民主主義」「男女平等」「世界平和」は骨の髄までしみ込んだ。戦前戦中とは違う人間を育てたいという教諭の目は輝いていた。

阪大で手がけた国際教育プログラムは、私の理想の実現を目指したものであり、学生海外派遣は異文化を経験して欲しいという思い。「男女平等」の理解には、100冊の本を読むより「男女平等」が実現している国で生活するほうがよほど早く深い。帰国した学生たちが持ち帰る実験データ以上に私には彼らの人間として「成長」が楽しみだった。日本人は華道、書道、という「道」に表出されているように、道を究めたがる。道を究めたいという思いは、こと大学教育では、蛸壺化を促すカリキュラム肯定の危険性をはらむ。いち早く専門家にはなれるものの、アゴラに行って商いが議論が出来ない人間を生産する。まず「大学にアゴラ」を誕生させることが重要。この最終講義は出席者全員に宿題を出す。本講義での「大学にアゴラ」の解説をヒントに（社会における）「アゴラとしての大学」という課題で期限なしでグループワークでレポート提出して欲しい。大学には国際社会のアゴラとなりうるポテンシャルがあるのだ。



おぎはら・さとし

プロフィール

略歴：昭和49年国際基督教大学教養学部自然科学科卒業。昭和51年大阪大学理学研究科生理学専攻修士課程修了。昭和55年同博士課程修了、博士学位取得（大阪大学）。日本学術振興会奨励研究員、米国アルバートアインシュタイン医科大学にて博士研究員。その後、大阪大学教養部助手、同理学研究科助教を経て、平成15年大阪大学理学研究科教授。平成23年9月退職。同10月より大阪大学名誉教授。平成18年より国際企画推進本部兼任。その後、産学連携本部、コミュニケーションデザインセンター兼任。学部教育大学院教育の国際化を目標に特に学生・若手研究者の海外派遣に次のようなプログラム立案と実施に必要な外部資金の導入に尽力した。イニシアティブ（魅力的な大学院化プロジェクト）、BMC統合理学教育、ITP、ICI ECP、CLIC、FrontierLab@OsakaU、「大航海時代」、グローバル30。

表彰等

真鍋知弥君「平成23年 電子デバイス研究会 論文発表奨励賞」受賞

基礎工学研究科・システム創成専攻・電子光科学領域の真鍋知弥君（博士前期課程2年）が、10月に八戸で行われた「電子情報通信学会電子デバイス研究会」にて「ゲート付CNT電子源を用いたX線源の開発」というタイトルで発表し、論文発表奨励賞を受賞しました。

今回の真鍋君の発表は、レントゲン撮影時の不要な被爆低減が期待できる平面X線源にゲート付カーボンナノチューブ(CNT)電子源を使用し、X線放出のパルス制御を達成した点が評価され、受賞となりました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



五十川貴之君「2011 IEEE International Topical Meeting on Microwave Photonics」Best Student Paper Award受賞

基礎工学研究科・システム創成専攻・電子光科学領域の五十川貴之君（博士前期課程1年）が、10月18日（火）～21日（金）にシンガポールにおいて開催された標記の国際会議において、Best Student Paper Awardを受賞しました。

論文タイトルは「Tomographic Imaging Using Photonically Generated Low-coherence Terahertz Sources」というもので、光技術により発生させた低コヒーレンス・テラヘルツ波で、物体の3次元イメージングに世界で初めて成功したものです。テラヘルツ波を使った非破壊検査技術の汎用化・経済化に大きく貢献するものとして期待されます。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



高野友里さん第8回Asian-Pacific Congress of Hypertension 2011の Young Investigators Fellowshipsを受賞

医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座博士前期課程2年の高野友里さん（医療情報学研究室）が、11月に台北（台湾）で開催された第8回 Asian-Pacific Congress of Hypertension 2011において栄えある Young Investigators Fellowships を受賞しました。

受賞対象となった研究では降圧剤である Amlodipine をラットに前投与することで、精神的負荷による心機能低下が予防できることを示しました。この研究は地震災害などにより心筋梗塞などの循環器疾患が増加するような状況に、どのような降圧剤が有効かを考える上で有益な基礎データとなると期待されます。

（医学系研究科・医学部）



各国の受賞者と座長：高野友里さんは右から4人目

山内直人教授、奥山尚子特任助教「ARNOVA最優秀論文賞」受賞

国際公共政策研究科の山内直人教授と社会経済研究所の奥山尚子特任助教が、11月にカナダのトロントで開催された非営利・ボランティア活動研究学会（ARNOVA）の年次大会において、「最優秀論文賞」（Best Paper Award）を受賞しました。受賞対象となった論文は、ソーシャル・キャピタルが個人の寄付行動やボランティア活動に与える影響について、最新のデータを厳密な統計分析手法によって解析したことなどが評価されました。なお、奥山尚子助教には、「若手研究者奨励賞」（Emerging Scholar Award）も授与され、ダブル受賞となりました。

（国際公共政策研究科）



佐藤泰裕准教授「2011年度日本応用経済学会賞」受賞

経済学研究科の佐藤泰裕准教授が、「2011年度日本応用経済学会賞」を受賞しました。

この賞は、当該授賞年度および前年度に発表された、学会誌『Studies in Applied Economics 応用経済学研究』ほか国内外の応用経済学関連の論文ないし著書において、優れた業績を示した研究者に対して授与されるものです。表彰式は、11月27日（日）に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された2011年度日本応用経済学会秋季大会の席上で行われました。

（経済学研究科・経済学部）



Gyeongshin Choi君「International Symposium on Catalysis and Fine Chemicals 2011・ポスター賞」受賞

基礎工学研究科・物質創成専攻・機能物質化学領域・有機金属化学グループのGyeongshin Choi君（博士後期課程1年）が、平成23年12月4（日）～8日（木）、奈良で開催されたInternational Symposium on Catalysis and Fine Chemicals 2011で「Preparation of Bis (cyclometalated) iridium Complexes via Direct C-H Bond Activation and Their Application for Insertion Reaction of Terminal Alkynes」の発表を行い、ポスター賞を受賞しました。Ir錯体を用いた複素芳香環のC-H結合活性化反応に対する配位子の置換基効果明らかにするとともに、複素環と1-アルキンの炭素-炭素結合形成反応を見出したことが学術的に高く評価されました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



Prof. Makoto Onaka（組織委員、左）とChoi君（右）

永妻忠夫教授・塩出剛士君「2011 Asia Pacific Microwave Conference」 Best Paper Award・Best Student Paper Awardをダブル受賞

基礎工学研究科・システム創成専攻・電子光科学領域の永妻忠夫教授と塩出剛士君（博士前期課程1年）が、2011年12月5日（月）～8日（木）にオーストラリア・メルボルンにおいて開催された標記の国際会議において、それぞれ Best Paper Award（APMC2011 Prize）と Best Student Paper Award（APMC2011 Student Prize）を受賞しました。前者は、テラヘルツ波無線通信のための新しいアンテナ技術に関して、東京工業大学（廣川二郎准教授・写真左端）と共同で行った研究成果、後者は、同じくテラヘルツ波無線通信の受信機に、共鳴トンネルダイオードと呼ばれる電子素子を世界で初めて適用し高感度化に成功したもので、ローム（株）との共同研究成果です。テラヘルツ波無線は、光ファイバー通信並みのデータ伝送速度を実現できる超高速無線技術として大きな期待が寄せられています。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



永妻教授（中央）、塩出君（右）

輪島裕介准教授「第33回サントリー学芸賞」受賞

文学研究科文化表現論専攻（音楽学）の輪島裕介准教授が、著書「創られた「日本の心」神話～「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史」（光文社新書）によって第33回サントリー学芸賞（2011年度）を受賞しました（芸術・文学部門）。

この賞は、前年1月以降に出版された著作物を対象に選考し、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動を、著作を通じて行った個人に対して与えられるもので、人文・社会科学の分野では最も権威ある賞の一つです。

贈呈式は、12月12日（月）、東京・千代田区の東京会館において開催され、本賞の楯、および副賞が授与されました。

（文学研究科・文学部）



輪島准教授（前列一番右）

藤田雄三君、倉敷哲生准教授「日本繊維機械学会論文賞」受賞

工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻博士後期課程の藤田雄三君、同専攻の倉敷哲生准教授が「平成23年度日本繊維機械学会論文賞」を受賞しました。

受賞対象となった研究主題は「テキスタイル複合材料のマルチスケール解析手法の提案と力学的特性評価」です。昨年5月に大阪科学技術センターにて授賞式が行われ、日本繊維機械学会の木村照夫会長から賞状と記念盾が贈られました。

（工学研究科・工学部）

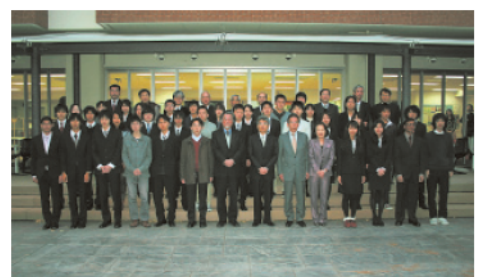


左から 倉敷准教授、藤田君

大阪大学教養教育優秀賞表彰式举行

12月20日（火）にステューデント・commonsにおいて教養教育優秀賞表彰式を行いました。応募者の中から全学共通教育科目において優秀な学業成績を修めた50名が選ばれ、平野総長から表彰状が授与されました。続く懇談会では平野総長がご自身のインタビューが掲載された学士会発行の冊子「U7」にサインし、受賞者一人一人に激励の言葉とともに渡するなど、祝福ムードに包まれた和やかな会になりました。

（大学教育実践センター）



「第7回豊中市都市デザイン賞」受賞

大阪大学創立 80 周年記念事業の一環として実施された大阪大学会館の周辺環境整備が「第7回豊中市都市デザイン賞」を受賞しました。

本整備計画は地域住民等とワークショップを開催し議論を重ねながら作られ、登録有形文化財である大阪大学会館

の歴史的景観を活かしつつ、地域の憩いの場として誰もが利用できる開放的な空間となりました。

表彰式は、12月9日(金)に豊中市立豊島体育館にて行われ、浅利敬一郎豊中市長から表彰状と記念プレートが贈られました。



右から浅利豊中市長、恵比須 繁之理事・副学長、
キャンパスデザイン室吉岡聡司助教



大阪大学会館の周辺環境整備

(施設部管理計画課)

第1回大阪大学総長による表彰

1月12日(木)、総長室において標記表彰式が被表彰者 19 名のうち 14 名の出席のもとに行われました。

この表彰は、賞の受賞や資格の取得などにより本学の発展に寄与した、主として若手教職員に対して、総長から直接ねぎらいの言葉をかけ、懇談することを目的としています。

今回表彰された方は、次のとおりです。



平野総長を囲む被表彰者（准教授）

中 谷 伸 二	(本部事務機構)	加 嶋 健 司	(基礎工学研究科)
梅 川 雄 一	(理学研究科)	土 方 嘉 徳	(基礎工学研究科)
山 咲 和 久	(医学系研究科)	古 澤 力	(情報科学研究科)
藤 埜 浩 一	(医学部附属病院)	藤 井 高 志	(生命機能研究科)
大 嶋 隆	(歯学研究科)	川 井 清 彦	(産業科学研究所)
河 田 聡	(工学研究科)	小 林 一 雄	(産業科学研究所)
松 田 崇 弘	(工学研究科)	木 谷 茂	(生物工学国際交流センター)
柏 木 正	(工学研究科)	阿 保 智	(極限量子科学研究センター)
鈴 木 義 茂	(基礎工学研究科)	白 石 康 浩	(太陽エネルギー化学研究センター)
西 田 正 吾	(基礎工学研究科)		

新教授紹介

太 田 亘 (おおた わたる)

大学院経済学研究科



所 属：大学院経済学研究科経営学系専攻ビジネス講座
専門分野：金融経済学、マーケット・マイクロストラクチャー

【略歴】

- 平 3. 3 東京大学経済学部経済学科 卒業
- 8. 8 東京大学大学院経済学研究科現代経済専攻第2種博士課程単位修得退学
- 8. 8 一橋大学講師（研究機関研究員）経済研究所
- 9. 4 名古屋大学講師経済学部
- 10. 6 博士（経済学）（東京大学）
- 11. 4 名古屋大学助教授経済学部
- 12. 4 名古屋大学助教授大学院経済学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院経済学研究科
- 24. 1 大阪大学教授大学院経済学研究科

松 本 卓 也 (まつもと たくや)

大学院理学研究科



所 属：大学院理学研究科化学専攻物理化学講座
専門分野：反応物理化学、分子ナノ科学、走査プローブ顕微鏡

【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学工学部応用精密化学科卒業
- 61. 3 大阪大学大学院理学研究科無機及び物理化学専攻前期課程修了
- 平 2. 3 大阪大学大学院理学研究科無機及び物理化学専攻後期課程修得退学
- 2. 6 理学博士（大阪大学）
- 3.10 大阪大学助手産業科学研究所
- 7. 4 大阪大学助手産業科学研究所附属高次インターマテリアル研究センター
- 10.12 大阪大学助教授産業科学研究所附属高次インターマテリアル研究センター
- 14. 4 大阪大学助教授産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター
- 19. 4 大阪大学准教授産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター
- 24. 1 大阪大学教授大学院理学研究科

小 川 和 彦 (おがわ かずひこ)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科放射線統合医学講座（放射線治療学）
専門分野：放射線腫瘍学、放射線生物学、分子腫瘍学

【略歴】

- 平 3. 3 千葉大学医学部医学科卒業
- 3. 5 医員（研修医）（千葉大学医学部附属病院）
- 4.10 医員（研修医）（琉球大学医学部附属病院）
- 5. 4 医員（琉球大学医学部附属病院）
- 5. 6 琉球大学助手医学部附属病院
- 10. 8 琉球大学助手医学部（～平16.12まで）
- 15. 5 九州大学生体防御医学研究所分子腫瘍学研究員（～平16.4まで）
- 16. 8 医学博士（琉球大学）
- 17. 1 琉球大学講師医学部附属病院（～平19.10まで）
- 17.10 米国ハーバード大学マサチューセッツ総合病院放射線腫瘍科研究員（～平18.4まで）
- 19.10 琉球大学准教授医学部附属病院
- 23.12 大阪大学教授大学院医学系研究科

新教授紹介

近 江 雅 人 (おうみ まさと)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科保健学専攻医療技術科学分野医用物理工学講座
専門分野：生体医用光学

【略歴】

- 平 2. 3 福井大学工学部電気工学科卒業
- 4. 3 大阪大学大学院工学研究科電磁エネルギー工学専攻博士前期課程修了
- 6. 4 日本学術振興会特別研究員（平7.3まで）
- 7. 3 大阪大学大学院工学研究科電磁エネルギー工学専攻博士後期課程修了
- 7. 3 博士（工学）（大阪大学）
- 7. 4 大阪大学助手医学部
- 15. 4 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学助教大学院医学系研究科
- 24. 1 大阪大学教授大学院医学系研究科

小 西 かおる (こにし かおる)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野総合ヘルスプロモーション科学講座
専門分野：地域看護学、在宅看護学、難病看護学、災害看護学、呼吸ケア

【略歴】

- 昭63. 3 千葉大学看護部看護学科卒業
- 63. 4 聖マリアンナ医科大学病院看護師
- 平 3. 9 米国NY州Wagner College ELS留学
- 8. 3 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士前期課程修了
- 12. 3 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士後期課程修了
- 12. 3 博士（保健学）（東京大学）
- 12. 4 東京都医学研究機構東京都神経科学総合研究所常勤研究員
- 18. 4 昭和大学保健医療学部教授
- 24. 1 大阪大学教授大学院医学系研究科

富田研一名誉教授(薬学部)逝去



本学名誉教授富田研一先生は、病氣療養中のところ、平成 23 年 11 月 7 日に逝去されました。享年 83 歳でした。

先生は昭和 28 年広島大学理学部物理学科をご卒業後、昭和 30 年広島大学大学院理学研究科修士課程を修了、昭和 34 年大阪大学大学院理学研究科博士課程を修了され、アメリカ合衆国マサチューセッツ工科大学研究員、大阪大学たんぱく質研究所助手、薬学部助教授を経て、昭和 51

年同教授に昇任、平成 4 年に停年退官され、名誉教授の称号を授与されました。

先生は、永年にわたってアミノ酸、蛋白質、包接化合物、天然有機化合物、核酸関連物質の X 線構造解析法による立体構造決定法確立と、それに基づく構造化学的研究による生理活性機構の解明と薬学への応用の礎を築く等、顕著な功績を挙げてこられました。特に、核酸の分子構造研究において、それまで仮説に過ぎなかった DNA の相補的 2 重鎖モデルを直接的に実証し、この業績により日本薬学会賞(学術賞)を受賞しています。

教育面では広い視野と高邁な識見で後進の指導教育に努められ、我が国の構造生物学を担う多くの人材を世に送り出しました。

学内においては、大阪大学評議員、大学院審議会委員などの学内委員を勤められ、大阪大学の運営、発展に尽くされました。

先生の長年のご功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(薬学研究科・薬学部)

松田久名誉教授(教養部)逝去



本学名誉教授松田久先生は、平成 23 年 11 月 13 日にご逝去されました。享年 87 歳でした。

先生は、昭和 25 年 3 月大阪大学理学部物理学科を卒業後、同理学部大学院を経て、昭和 30 年 8 月大阪大学理学部助手に採用されました。昭和 34 年 5 月大阪大学理学部助教授、次いで昭和 38 年 3 月大阪大学分校教授に昇任され、昭和 38 年 4 月に大阪大学教養部となり、物理学の研究、教育に従事され、昭和 62 年 3 月に定年退職されました。この間、昭和 47 年 4 月より昭和 51 年 3 月まで大阪大学評議員を併任されるなど、大学行政の重要な委員を歴任し、大学の管理運営に大きく貢献されました。

先生は、世界の質量分析学の発展に大きな足跡を残された実験科学者のお一人です。大学卒業後、ペンブリッジ・ヨルダン型質量分析器を改良し、分解能 6 万の高分解能を得ることに成功、水素から硫黄に至る軽元素の原子質量の精密測定に成功されました。ついで昭和 28 年から 31 年にかけて、緒方・松田型と呼ばれる大型高分解能質量分析器を設計・製作し、最大分解能 90 万の実現に成功されました。

その後、教養部に配置換え後、ただちに新しい独自のイオン光学系を有する r^{-1} とよばれている超高分解能質量分析装置の設計・製作に取り組み、質量分解能 120 万という世界最高の成果を得ることに成功されました。この値は現在でも破られていません。この装置は、永く教養部(共通教育)物理棟に展示されていましたが、平成 7 年の阪神・淡路大震災の際に崩壊しました。現在は国立科学博物館に歴史的・科学的価値のある資料として寄贈され保管されています。この業績に対して昭和 44 年、仁科賞を受賞されました。

昭和 43 年から 44 年にかけてドイツ連邦共和国ギーセン大学へ客員教授として出張され、その間、電場及び磁場の端縁場を正しく数値的に表す方法を確立され、質量分析装置の設計に必要なイオン光学の計算手法を完成されました。これらの技法を駆使して新しい卓越した質量分析装置の設計を次々と行なわれました。それらの多くのアイデアは実用化され、松田先生の名声は世界各国の質量分析装置を使用する研究者間に知れわたることになりました。昭和 49 年に CQH とよばれている大型質量分析装置を設計・製作し、これを用いて生体高分子の質量分析法の開発研究に着手し、画期的な研究成果をあげられました。これらの業績に対し昭和 57 年、東レ科学技術賞が授与されています。

平成 3 年に質量分析の卓越した研究業績に対して授与される国際質量分析学会のトムソンメダルを受賞されたことは、まさしく松田先生に対する高い国際的評価を示すものといえます。平成 14 年春には、これまでのご功績により勲三等旭日中綬章を受章されております。

世界の質量分析学の発展において多大な貢献をされました先生のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(大学教育実践センター)

山口節郎名誉教授(人間科学研究科)逝去



本学名誉教授、山口節郎先生は、平成 23 年 11 月 26 日食道癌のため逝去されました。享年 71 歳でした。

先生は、昭和 47 年 3 月東京大学大学院社会学研究科博士課程単位修得退学後、明治大学商学部専任講師を経て、昭和 51 年 4 月大阪大学人間科学部助教授に着任されました。昭和 62 年 4 月に教授に昇任の後、平成 12 年 4 月大学院人間科学研究科教授となり、平成 8 年 5 月から平成 10 年 4 月大阪大学評議員を務め、平成 15 年 3 月 31 日大阪大学を退職され、名誉教授の称号を授与されました。

この間、長年にわたり学生・大学院生の教育と社会学の研究に尽力され、多くの業績を挙げられました。先生の研究は、『社会と意味』および『現代社会のゆらぎとリスク』の主著にみるように、主に理論社会学と現代社会論の分野を軸にしたものです。両分野について取り上げられたテー

マは時代の知的変化に応じて種々様々で、時代の先端を行く、優れた多くの論考が残されています。

数多い論考の中でも、新しい社会運動を考察した「労働社会の危機と新しい社会運動」は、1970 年代後半以降大きな流れを形成していた「新しい社会運動」について理論的な考察を加えた論文として、日本では古典的な地位を得ており、現在でも必読文献とされています。また、「リスク社会」としての現代社会を念頭に置きながら、「リスク」概念を精緻に展開した『現代社会のゆらぎとリスク』の最終章は、日本でまだこの分野での業績が数少ない現在、すでに先駆的な地位を占めていることは過言ではありません。

先生は教育研究のかたわら、日本社会学会理事（学会賞委員会委員長兼）、日本現象学・社会学会委員として、学会の発展に貢献されるとともに、平成 8 年 5 月から平成 10 年 4 月には大阪大学評議員として、大学院重点化にともなう種々の人間科学研究科の改革に尽力されました。また、日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員として、学術行政の発展にも貢献されました。

大阪大学退官後は、関西大学総合情報科学部総合情報学教授として平成 23 年 3 月まで教鞭をとられ、平成 17 年 10 月から平成 18 年 9 月まで同大学大学院総合情報学研究科長を務め、私学教育・研究に尽力されました。

山口節郎先生の在りし日のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(人間科学研究科・人間科学部)

竹田義郎名誉教授(歯学部)逝去



本学名誉教授竹田義郎先生が平成 23 年 12 月 20 日に、享年 89 歳で逝去されました。

先生は昭和 20 年 9 月大阪高等医学専門学校卒業、同 24 年 6 月大阪大学医学部助手となられ、同 27 年 7 月医学博士の学位を取得されました。昭和 27 年 8 月より同 30 年 9 月までアメリカ合衆国カリフォルニア大学に留学され、同 30 年 10 月大阪大学助教授医学部、同 34 年 12 月大阪大学教授歯学部昇任されました。さらに同 49 年 5 月徳島大

学教授ならびに歯学部創設準備室長となられました。

竹田先生は本学歯学部生化学講座の初代教授として教育・研究体系の確立にご尽力され、豊かな識見と熱意をもって後進の指導に力を傾けられ、その薫陶を受けた門下生は現在も我が国の医学および歯学研究のリーダーとして活躍しています。特に徳島大学に歯学部創設準備室長として転出され、その重責を果たされるとともに、同大学に本学出身の教授、助教授を多数輩出させ、本学に多大の貢献と功績を残されました。

研究面では大阪大学の伝統を受け継ぎ、アミノ酸代謝研究において優れた独創性を発揮され、数多くの業績を挙げられました。また細胞の増殖に重要な役割を有するポリアミンの研究においては多くの新事実を明らかにされ、ポリアミンに関する国際会議の会長を務められるなど、その研究成果は国内外において高く評価されました。また平成 8 年には勲二等瑞宝章を授与されました。

竹田先生の長年にわたる多大のご功績を偲び、また育んで頂いた多くの門下生の心からの感謝を込めて、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(歯学研究科・歯学部)

「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY
-Academic Achievements- 2010-2011」刊行のお知らせ

本学の優れた研究成果を国内外に発信する英文研究年報「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY -Academic Achievements- 2010-2011」を平成 24 年 1 月に刊行しました。平成 12 年の創刊以来、第 12 巻目の刊行となります。本誌は、全学の研究者からの応募論文のうち、人文・社会系、理学系、工学系、及び生物系の各分野から選ばれた論文 100 編を掲載し、その中でも特に優れた論文として論文 10 選をとりあげています。

また、第 12 巻においても、第 11 巻同様に掲載内容を記録した CD を作成いたしました。大阪大学の紹介に是非お役立てください。

今後、各教員の方には冊子を 1 部ずつ配布する予定ですが、追加を希望される場合は所属部局等の事務担当部署または国際交流オフィス国際交流課国際連携係（内線 9572）までお知らせください。

また、大阪大学ホームページにも、今後掲載する予定ですので、そちらも併せてご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/report.html>



（国際交流オフィス国際交流課）

記 念 講 義

平成 24 年 3 月 31 日限りで定年等で退職される教授の記念講義（最終講義等）を、日程等が決まったものについてお知らせします。（平成 24 年 2 月 20 日以降に開催予定のものについて掲載しています。）

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
理学研究科 （数学専攻・大域数理学講座）	藤 木 明	平成24年3月23日（金） 15時～16時30分 理学部大講義室（D501）	研究生生活を振り返って
理学研究科 （物理学専攻・物性物理学講座）	大 貫 惇 睦	平成24年3月2日（金） 10時～11時30分 大阪大学会館講堂	単結晶育成と重い電子系の物理
理学研究科 （物理学専攻・量子物理学講座）	赤 井 久 純	平成24年3月2日（金） 13時～14時30分 大阪大学会館講堂	計算機物理
理学研究科 （生物科学専攻・ 相関生物学講座）	金 澤 浩	平成24年3月17日（土） 14時～15時30分 大阪大学会館講堂	イオンを運ぶ細胞の膜タンパク質を研究して
理学研究科 （宇宙地球科学専攻・ 宇宙惑星進化化学講座）	松 田 准 一	平成24年3月16日（金） 16時～17時30分 理学部大講義室（D501）	私が選んだ私の三大論文 ー研究生生活を回想してー

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
理学研究科 (現理事・副学長)	東 島 清	平成24年3月2日(金) 14時50分～16時20分 大阪大学会館 講堂	物理学に志して
医学系研究科 (医学専攻・ 病理学講座病態病理学教室)	青 笹 克 之	平成24年 2月29日(水) 15時～17時 医学部講義棟A講堂	病理学37年
医学系研究科 (医学専攻・ 社会環境医学講座法医学教室)	的 場 梁 次	平成24年 2月21日(火) 16時～17時30分 医学部講義棟A講堂	突然死の研究 ～青壮年から乳幼児へ・病死から覚醒 剤へ～
医学系研究科 (医学専攻・感染免疫医学講座 免疫動態学教室)	宮 坂 昌 之	平成24年 3月5日(月) 15時～17時 医学部講義棟A講堂	リンパ球動態を規定する分子機構： ドグマとエニグマ
医学系研究科 (医学専攻・生体統御医学講座 麻酔・集中治療医学教室)	真 下 節	平成24年3月8日(木) 16時～17時 医学部講義棟B講堂	麻酔と痛み
医学系研究科 (医学専攻・外科学講座 小児成育外科学教室)	福 澤 正 洋	平成24年3月19日(月) 16時～17時30分 医学部講義棟A講堂	小児外科とともに30年
歯学研究科 (口腔分子免疫制御学講座 (小児歯科学教室))	大 嶋 隆	平成24年2月23日(金) 16時～17時 歯学研究科D棟4階 大講義室	小児う蝕の撲滅を目指して
薬学研究科 (分子薬科学専攻・ 薬品製造化学分野)	田 中 徹 明	平成24年3月2日(金) 14時～15時30分 薬学研究科2号館 特別講義室（4階）	くすりは有機化合物である
工学研究科 (地球総合工学専攻・ 社会システム学講座 国土開発保全工学領域)	出 口 一 郎	平成24年3月23日(金) 15時～17時 理工学図書館ホール	漂砂の行方 一波のまにまに海浜変形を見つめて40 年ー
基礎工学研究科 (物質創成専攻・ 化学工学領域環境・エネルギー システム講座)	井 上 義 朗	平成24年3月9日(金) 15時～17時 基礎工学国際棟 シグマホール	ミキシングの不思議と流体のたくらみ
基礎工学研究科 (システム創成専攻・ 数理科学領域統計数理講座)	白 旗 慎 吾	平成24年3月16日(金) 15時～ 基礎工学国際棟 シグマホール	ノンパラメトリックス40年

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
情報科学研究科 (ディペンダビリティ工学講座)	菊 野 亨	平成24年3月9日(金) 15時30分～17時 銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホール	「先読み」を追い求めて30年
生命機能研究科 (個体機能学講座・ ヒト細胞生物学グループ)	田 中 亀代次	平成24年3月16日(金) 15時～ ナノ棟3階講義室	細胞に学ぶ： 色素性乾皮症研究に魅せられて36年
連合小児発達学研究科 (こころの発達神経科学講座・分子 生物遺伝学研究領域・医学系研究 科解剖学講座(神経機能形態学))	遠 山 正 彌	平成24年3月15日(木) 15時～16時30分 医学部講義棟A講堂	「青斑核ノルアドレナリンニューロンか ら心の障害の克服まで」(仮)
産業科学研究所 (光・電子材料研究分野)	朝 日 一	平成24年3月9日(金) 15時～16時30分 産業科学研究所講堂	分子線エピタキシと新半導体・新デバ イス創製研究35年 ー多くの人に支えられてー
産業科学研究所 (金属材料プロセス研究分野)	中 嶋 英 雄	平成24年2月28日(火) 15時～16時30分 産業科学研究所講堂	物性研究から材料開発に転じて
蛋白質研究所 (現理事・副学長)	相 本 三 郎	平成24年3月2日(金) 15時30分～16時30分 蛋白質研究所1階講堂	ペプチド化学とともに歩んだ40年
ラジオアイソトープ 総合センター	斎 藤 直	平成24年3月9日(金) 15時～16時30分 ラジオアイソトープ総合 センター吹田本館大講義室	放射線と放射性核種の利用から管理へ
総合学術博物館 (現理事・副学長)	江 口 太 郎	平成24年2月24日(金) 15時30分～ 大阪大学会館講堂	分子からマチカネワニへ旅して
日本語日本文化教育センター (センター長)	奥 西 峻 介	平成24年3月19日(月) 14時30分～16時 大阪大学会館講堂	亡羊の弁 ー人と知との邂逅ー

大阪大学シンポジウム“日本、いまから・ここから…”―若者必聴!

大阪大学の各分野の専門家が日本のこれからを提言。甚大な被害の「東日本大震災」や各地の風水害、私たちの社会は、昨今の災害大変不況から如何に学びいま、一人の市民として何が出来るのか。また、閉塞した日本に対して、大阪大学人がどのような、“いまから”の日本を創る「英知」を差し出せるのか“ここから”市民の方々と一緒に考え、発信します。特にこれから社会人となる若者やU 30 の若人へ向けて、日本のこれからについてトークセッションを行います。

日	時	平成 24 年 3 月 4 日(日) 13 時 00 分から 17 時 30 分
会	場	毎日新聞社オーバルホール (大阪市北区梅田 3 丁目 4-5 毎日新聞社・地階)
定	員	450 名 (要申込)
主	催	大阪大学
後	援	毎日新聞社
担	当	大阪大学 21 世紀懐徳堂 (06-6850-6443) info@21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp

■プログラム

第 1 部▼ パフォーマンス「アルビレオの観測所―レクイエムから明日へ」(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より)

演出／山口浩章

出演／大阪大学文学研究科演劇学研究室&アートメディア論コース学生 他

第 2 部▼ 講演「私たちの未来選択」

(出演順)

- ・大竹文雄 (大阪大学社会経済研究所・教授)
- ・小林傳司 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・教授)
- ・石黒 浩 (大阪大学基礎工学研究科・教授)

第 3 部▼ 座談会「教えて! これからの日本」

司会／西 靖 (毎日放送アナウンサー)

大竹文雄 / 小林傳司 / 石黒 浩



URL <http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/events/2012/symposium20120304>

平成23年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式

今年度の卒業式・大学院学位記授与式を次により挙行いたします。

日 時：平成 24 年 3 月 22 日 (木) 11 時 00 分～ 12 時 40 分 (予定)

9 時 30 分入場開始 10 時 30 分入場完了

場 所：大阪城ホール (JR 環状線「大阪城公園」駅下車 徒歩 5 分)

※同伴者の方は 2 名までとさせていただきます。また、入場には整理券が必要になります。(整理券の配付方法については後日、卒業予定者・修了予定者の方に学生専用 HP「KOAN」を通じてお知らせする予定です。)

※開始 30 分前までに入場完了願います。遅刻された場合、式場への入場をお断りする場合がありますのでご注意ください。

※車での来場はご遠慮下さい。

〈問い合わせ先〉

総務企画部総務課総務係 TEL：06-6879-7014

大阪大学総合学術博物館創立10周年記念第5回特別展
巨大ワニと恐竜の世界
—巨大爬虫類2億3千万年の攻防—

日本を代表する爬虫類化石で世界から注目を浴びているマチカネワニ。マチカネワニの祖先にはどのようなものがいたのか。祖先たちは恐竜と戦っていたのか。「巨大ワニと恐竜の世界」展では、主に3つの時代にさかのぼり、ワニの進化と恐竜との争いを紹介する。

約1億5千万年前（ジュラ紀後期）の北米大陸、約1億年前（白亜紀中ごろ）のゴンドワナ大陸、そして恐竜が絶滅する直前の約7千万年前（白亜紀末）の北米とアジアが、時空を超えて大阪大学総合学術博物館によみがえる。

会 場 大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館
会 期 平成24年(2012)4月7日(土)～6月30日(土) 日曜・祝日は休館
ただし、4月30日、5月3日～5日は開館
開館時間 10時30分～17時
入 館 料 無料
主 催 大阪大学総合学術博物館
共 催 北海道大学総合博物館、豊中市・豊中市教育委員会、大阪大学理学研究科
協 力 大阪大学21世紀懐徳堂、国立科学博物館、群馬県立自然史博物館、神流町恐竜センター、
茨城県自然博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、有限会社ゴビサポートジャパン

会期中、ミュージアムレクチャー（4回）、ワークショップ（2回）を実施予定

※常設展示もごございますので、是非、総合学術博物館へお越しください。

大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-20

TEL：06-6850-6284 <http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>

交通のご案内 阪急宝塚線「石橋駅」下車、徒歩10分

※公共交通機関をご利用ください。

また、当館はバリアフリーですので、障害者向駐車場スペースをご活用ください。



INTERVIEW

こむら 小村
いつみ 愛美

仕事も泳ぎも
無駄なく無理なく

総合図書館利用支援課フロアサービス班

今回お話を伺った小村さんは、幼い頃に水泳と出会い、身近な存在だった「本」を職業に選んだ。図書館職員として総合図書館カウンターに立つ小村さんに、水泳と図書館職員の魅力や共通点を聞いた。

「泳ぎ始めた頃の記憶って、あまりないんですよね」と笑顔で話す小村さん。スポーツ好きの父の影響もあり、姉と兄に倣って、3歳から水泳教室に通い始めた。小学生になると、選手コースへ進み、週5日の水泳生活となる。しかし、義務で泳ぐことに疑問を持ち、中学時代はバスケ、高校時代は剣道と別のスポーツに取り組んだ。

大学に進学し、再び水泳と出会う。「たまたまサークルの勧誘を受けたんです。自分のペースで、自分の喜びのためにもう一度泳いでみようかなと思いました。」

大学時代は、週2～3回のペースで、一日3,000メートル程度泳ぎ込んだ。マスターズ大会で自己記録を更新することが嬉しく、自然に練習にも熱が入った。

マスターズ大会は、「健康・友情・相互理解・競技」をモットーに、参加者が自己ベストの更新を目指して集まる。予選はなく、事前の申請タイムで泳ぐ組とコースが決まる。「大学時代に、たまたま隣のコースに当時の日本代表選手がいたこともありました。」そんなサプライズがあるのも楽しみだという。

仕事を始めても、社会人チームで水泳を続けている。学生のころは、体力だけで泳ぎ、記録をねらっていたが、今はフォームを改造し、どうすれば速く、無駄なく泳げるか試行錯誤をくりかえす。「学生時代よりも時間と体力は限られています。その中で、どれだけ効率よく練習しタイムを上げていくかを考える作業は、仕事に対する姿勢と通じるかもしれません。」



短水路マスターズ2011にて（前列左が小村さん）

小村さんは現在、総合図書館でフロアサービス担当としてカウンター業務や、図書館の案内、総合図書館と各研究科の蔵書点検の進行管理などを行っている。「利用者と直接対面する業務ですから、いろいろと気を遣うこともありますが、『ありがとう』のひとつことはやっぱりうれしいです。」と笑う。



「小さい頃から本が好きで、母親からは、外に遊びに行きなさいと叱られていました。」と話す小村さんは、幼稚園の頃から本が身近にあり、図書館に通う日々だった。特に小説が好きで、高校時代には図書館で働きたいと考え始めていたという。大学時代は日本史を勉強する傍ら司書資格を取得し、図書館職員になったのは自然の流れといえる。

多いときには、1日3,800人が来館する総合図書館。当初は、多岐に渡る業務に圧倒され、日常業務に埋もれてしまうという感覚もあったが、4年目をむかえる現在では、図書資料の保存に興味を持ち、業務の効率化を図りつつ、基礎的な文献や研修などを通して知識を増やしている。「職場環境も良く、資料保存の勉強をコツコツさせてもらいながら自分のすべきことを実践させてもらっています。」

幼い頃から身近にあった水泳と本。その両方をライフワークとしている小村さん。当面の目標は、「水泳は、大学時代に出した自己ベストを更新したいです。図書館の仕事では、資料保存の勉強を継続しつつ、サービス面だけでなく、書籍購入や資産管理など管理面も経験してみたい。図書館運営についてバランスがとれた考え方のできる図書館職員になりたいですね。」

バンコク教育研究センターと グローバルコラボレーションセンターの活動

バンコク教育研究センター長

関 達 治

50 年来の大洪水に見舞われたバンコクですが、バンコク市内は何事もなく活気に満ちています。タイの大学も含めた学校は、直接洪水で閉鎖したものの他、学生や職員の被災者が多く授業を休講していた学校も、12 月に入ってようやく元に戻りつつあります。その間、本学の留学生や職員から多くの励ましをタイの人々にいただいています。また、本学の卒業生も JICA の復興支援の通訳などで活躍しました。



発砲スチロールに荷物を載せて学内を移動する学生
(写真提供：カセサート大学)

さて、本日は、グローバルコラボレーションセンター (GLOCOL) からバンコク教育研究センターに派遣されている石高真吾先生が、活動 4 年目をむかえましたので、その活動や成果をお聞きました。

関：石高先生とタイとのご関係はどのようなものですか。

石高：私は、GLOCOL で通算 4 年勤務させていただいております。専門は文化人類学です。タイの地域研究をしており、以前はタイの護符信仰を研究しておりました。現在は、手工芸品を通じたマイクロインダストリー経営モデルに関心があり、タイおよび周辺国を中心に調査研究をしています。

関：さて、GLOCOL は、バンコク教育研究センターを拠点としてどのような活動をされているのですか。

石高：GLOCOL としては「東南アジア諸国の様々な現場や関係者（大学 / 政府 / NGO / NPO / 当事者・地域住民 / 国際機関）をつなぎながら、人間の安全保障に関する研究 / 教育 / 実践の連携を紡ぎ出す」というミッションに基

づいて活動しております。また、GLOCOL 本体が本学学内での超領域的連携のハブを担っているということから、様々な研究者や学生のタイ国での調査や、本学の提携大学とのネットワークづくりをお手伝いしております。

具体的に主な業績を挙げますと、平成 19 年度には、JICA との共同事業として「持続的な人間の安全保障とキャパシティディベロップメント」をタイで実施し、研修計画作成、ロジスティック、コーディネート、通訳一切を行いました。研修対象者は、東南アジア、南アジア諸国の政府、非政府機関で保健衛生、国家治安、行政、人間の安全保障政策の実践に関わる人々でした。研修内容は、日本で「持続的な人間の安全保障」に関する研修を受け、その後 3 ヶ月間自国へ戻り、自らの発表したアクションリサーチプランに基づいて調査を行い、タイにてその成果を発表するものでした。また、タイでは、日本とは異なった人間の安全保障の脅威、或いはそれに対処する現場を把握するため、タイ南部のスマトラ・ブーケット津波の復興活動や、ラノーン県のモーケン族という海上で生活している漂流民の状況、ミャンマーからの出稼ぎ労働者のおかれている状況を肌で感じてもらいました。

また、平成 21 年度と平成 22 年度には、GLOCOL バンコクセミナーと題して、計 9 回、人間の安全保障に関する国際会議及び、バンコク教育研究センターとの共催により一般向けのタイの文化と社会についてのシンポジウムを行いました。やってみて思ったのは、それぞれの会議は、いわゆる文系、理系と多岐にわたるのですが、バンコク教育



タイ王国ラノーン県での JICA 研修風景漂流民の住民との対話
(平成 20 年 3 月) (写真：石高真吾)



バンコクセミナーシリーズ「感染症予防のセミナー風景」
(平成 22 年 9 月) (写真：石高真吾)

研究センターの築いたネットワークのおかげで、結構「使える」コネがあるということでした。

関：使えるコネといいますと？

石高：ネットワークは、大別してインターネット上のバーチャルなもの、実際の社会でのリアルなものに分かれると思います。最も現在はバーチャルとリアルが混在するようになっているのであまりこの分け方は正しくなくなりました。「使えるコネ」というのは、有機的なものを指します。すなわち、普段からメールでも、電話でも、手紙でも、食事時でも何でもいいですからやり取りをしている人は、何かあったときはこちらの要望に応じてくれます。というのは、心理学で云うところの、「互酬性の法則」或いは行動経済学のゲーム理論で有名な「囚人のジレンマ」により、相手は、こちらにいいことをしてくれたら、或いは裏切らなければ、お返しにいいことをしてくれる、或いは裏切らないという関係が続くからです。人間関係も、関係がこのまま続くと考える限り、こちら側からの「お返し」或いは「しっぺ返し」を暗に期待するため、要望に応じてくれるのです。だから、彼らが何か要望に応じてくれるということは、私が将来彼らにとっても有用だと考えていただいているという訳です。すなわち、手前味噌ですが、私も「使えるコネ」に組み入れられているという訳です。もっとも、孟嘗君の食客の鶏鳴狗盗かもしれません。

関：話が少々脱線してしまいましたが、他の活動をお話しくさいますか？

石高：先にお話した、在留邦人向けの講演会は、バンコク教育研究センター開所 5 周年を記念して行われた「タイの社会と文化」に関するもので、そのうち一回は私もお話しさせていただきました。タイの信仰に関するもので「困らなくても神頼み一信ずる者は救われる、なぜタイは敬虔な仏教徒が多いのか？ 試論」というものです。題名の通り、タイは信仰心が篤い国です。私も大学院を修了してから、本当にいろいろ合理性だけでは説明出来ない現象を目にし

ました。なぜ信仰心が篤いかは、私がこたえると面白くないので、答えは皆さんがお探しください。

関：学生のためのプログラムもコーディネートされていますね。

石高：平成 23 年度は、海外体験型教育プログラムと題したプログラムの一環として、タイの北部チェンマイの山間部のカレン族の村で、本学の大学院生を対象とした海外フィールドスタディプログラムを実施し、引率と現地コーディネートを行いました。参加学生は文系だけではなく理系の学生もいました。一番やりがいを感じたのは、参加後の報告書で、「視野が広がった」という声を聞いた時です。また、現地の受け入れ側の村人も、我々からのフィードバックを真剣に期待しており、彼らからの要望で飲料水として使われている村の簡易飲料水の水質調査を行いました。



海外体験型教育プログラムでチェンマイ県カレン族村民と
談笑する学生 (平成 23 年 9 月) (写真：石高真吾)

さらに、平成 23 年度の大きな成果は、ユネスコバンコク事務所と、本学からのインターンの定期的な派遣受入れの覚え書きを締結することができたことです。これにより、本学より国際機関で働きたい学生のインターンシップが、カリキュラムの一環として行えるようになったと思います。

関：色々な活動をされて成果を挙げられていることを、場所を提供しているバンコク教育研究センターとして大変うれしく思うとともに感謝をしています。最後に、本学の皆さんにメッセージがあればどうぞ。

石高：風が吹かないときは風が吹くのを待ちましょう。無駄に漕ぐのは疲れるだけです。でも、帆は張っておきましょう。機会があればバンコクオフィスにお越しください。研究などのお手伝いをさせていただきます。

関：どうもありがとうございました。今後も協力できれば良いですね。

石高真吾特任助教：平成 14 年 3 月大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。平成 20 年 4 月から大阪大学グローバルコラボレーションセンター・バンコク現地代表。詳細は研究者総覧をご参照ください。

アレキサンドリア大学

Alexandria University



アレキサンドリア大学は、地中海に面するエジプト第二の都市で、「地中海の真珠」と称されるアレキサンドリア市に、1938年に設立された大学です。現在、教員数 6,272 人、学生数 175,591 人、大学院生数 19,510 人を擁し、医学部、歯学部、薬学部、看護学部、工学部、農学部、獣医学部、自然科学部、経済学部、法学部、芸術学部、社会人文学部、幼児教育学部、教育学部、特定教育学部、男子体育学部、女子体育学部、観光学部を開設するエジプト屈指の総合大学です。

同大学は、北エジプトの中核的な教育・研究拠点であると同時に、ヨーロッパ・地中海地域における高等教育および研究機関ネットワーク（EPUF）の共同議長機関としての



役割を担っています。また、同大学の中東およびアフリカ地域における役割は年々拡大しており、1960年にエジプト国外に初めての分校

をバイルートに設立し、現在南スーダンおよびチャドにそれぞれ分校を整備中です。教員のみならず学生の国際交流にも積極的で、世界各国から多くの留学生を受け入れています。同大学によって提起された古代アレキサンドリア図書館復興案は、国家プロジェクトに発展し、2002年に旧図書館跡に最新の建築技術を駆使して新アレキサンドリア図書館（Bibliotheca Alexandrina）が再建されました。

大阪大学は、微生物病研究所における日本学術振興会による科学研究費助成事業（2008－2010年）、二国間交流事業（2011－2012年）を契機に、2008年より同大学獣医学部と部局間学術協定を締結し、研究交流、共同研究の実施、講演、合同シンポジウムの開催など数多くの成果を挙げてきました。この成果を基盤として、昨年8月に大学間学術交流協定の締結に発展しました。

これにより、今後は幅広い分野にわたって、全学レベルの学生交流や研究交流の発展が期待されます。

大学 HP : <http://www.alexu.edu.eg/>

紹介者：生田和良（大阪大学微生物病研究所 ウイルス免疫分野）

E-mail: ikuta@biken.osaka-u.ac.jp

編集後記

今年初めての編集後記になります。皆さんは昨年末に大阪大学が公式 Twitter アカウントを開設したのをご存知でしたでしょうか？日本語版と英語版の2アカウントを公式アカウントとして開設しています。大阪大学に関するニュースやイベントについてご紹介しており、2月上旬の段階で900名以上の方にフォローになっていただいています。Twitter をご利用の方は是非フォローしてみてください。

【大阪大学公式 Twitter アカウント】

日本語 http://twitter.com/osaka_univ 英語 http://twitter.com/osaka_univ_e

(柿木)



大阪大学奇術研究会

不思議な世界へようこそ！



はじめましての人ははじめまして！はじめましてじゃない人はこんにちは！大阪大学奇術研究会です。私達は基本的には週3回集まって、年に一度の発表会に向けてステージマジックの練習をしています。ところでステージマジックというものをご存知でしょうか？ステージマジックって何かというとステージの上で音楽に合わせながらやるマジックです。ハトを出すマジックを思い浮かべる人が多いのではないかと思います。ステージマジックは何百人のお客さんの前でマジックができてとても楽しいものです。この経験は奇術研究会でしか味わえないものですし大学生活のかけがえのない思い出になります。

私達は発表会の他にもいろいろな活動をしています。学祭では大勢のお客さんの前でマジックショーを行ったり、間近でマジックを楽しんでもらうマジック喫茶を行っています。また子供会や企業からの依頼を受けてマジックショーをすることもあります。

奇術研究会に入るとステージマジック、トランプを使っ



たマジック、その他にもいろいろなマジックができるようになります。部員は大学から始めた人がほとんどですが経験を重ねて発表会の頃には立派なマジシャンになっています。マジックは見ている人に驚きと不思議を味わってもらい楽しんでもらう、そのことは私達にとっても楽しいことですしやりがいもあります。少しでも奇術研究会のことを知っていただけたら幸いです。



会長 小園 典也 (工2回生)

〈コメント〉

奇術研では、目の前で魅せるトランプ等を使ったマジックだけでなく、ステージの上に立って魅せる派手なマジックも披露しています！学祭でも公演しているので是非見に来て下さい！



練習場所：学生会館大集会室 or 学生交流棟練習室 4

練習日時：月、水曜日の 18：00～19：30、
土曜日の 10：00～12：00

部員数：4回生 8 人、3回生 12 人、
2回生 10 人、1回生 11 人

連絡先：小園典也 fumiyan238@ezweb.ne.jp
ホームページ <http://oumc.ojaru.jp/>

トピックス

「大阪大学卒業生の集い」を開催しました。

12月2日(金)に「大阪大学卒業生の集い」を学士会館(東京・神田)において開催しました。

これまで、本学ではホームカミングデイを毎年5月のいちょう祭と合わせて開催し、卒業生の方々を母校にお招きしていましたが、多くの卒業生がご活躍されている関東圏に在勤、在住の方々からの強い呼びかけに応え、本年度で3回目の開催となりました。

本学からは平野俊夫総長をはじめ、役員、研究科長が参加し、様々な世代から多くの卒業生の方々にご参加をいただき、参加者数は160名を超える盛況となりました。

第1部では、平野総長による主催者代表挨拶、恵比須理事・副学長による近況報告に続き、卒業生講演として中山譲治氏(第一三共株式会社代表取締役社長:大学院基礎工学研究科修了)から『第一三共の挑戦』

と題し、第一三共株式会社の活動内容と薬品業界の興味深い現状についてご講演いただきました。

会場を移し、第2部交流会が催され、熊谷信昭同窓会連合会会長(元総長)による挨拶、豊島久真男名誉教授による乾杯のご発声により交流会が始まりました。会場では名刺交換や在学中の思い出話に花が咲く様子があちらこちらで見受けられ、世代を越えた卒業生相互の交流を深めるとともに、あらためて母校の発展を祈念する機会となりました。

また、各学部同窓会東京支部の方々による近況報告が行われるなど交流会を盛り上げ、盛会裡に散会となりました。

ご多忙の所、ご来場いただきました皆様には、厚く御礼申し上げます。

(広報・社会学連携オフィス広報・社会学連携事務室)



平野総長による挨拶



中山譲治氏による講演の様子



交流会でのひとこま(総長を囲んで)